

平安京右京北辺三坊六町跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京北辺三坊六町跡

2014年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



1 井戸501（北東から）



2 井戸501完掘状況（北東から）



1 土坑396 唾壺出土状況（西から）



2 土坑396出土越州窯青磁唾壺

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、学生寮建設工事に伴う平安京跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

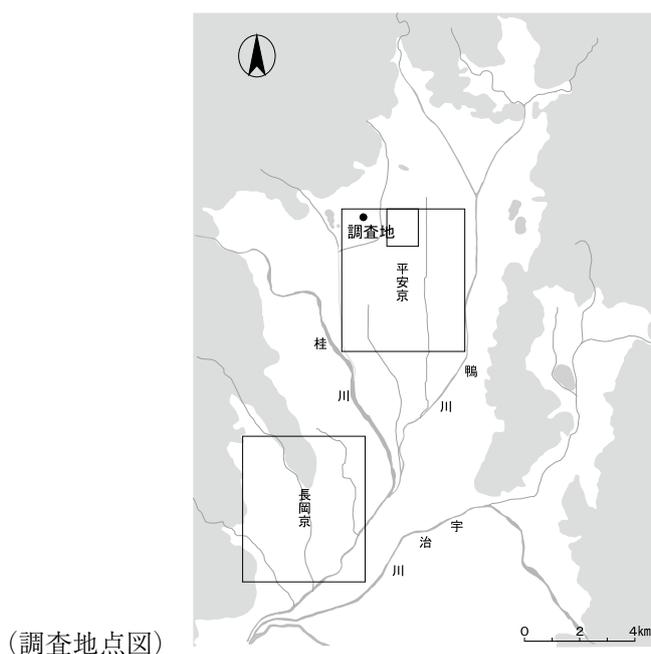
平成26年3月

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京跡（文化財保護課番号 13 H 145）
- 2 調査所在地 京都市北区大將軍坂田町22番地
- 3 委 託 者 学校法人立命館 理事長 長田豊臣
- 4 調査期間 2013年12月16日～2014年3月25日
- 5 調査面積 1,540㎡
- 6 調査担当者 柏田有香・金島恵一・伊藤 潔・南 孝雄
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「衣笠山」・「花園」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 柏田有香
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員および資料業務職員があたった。
- 15 協力者 調査および報告書作成にあたり下記の方々のご協力を得た。記して感謝いたします。
木立雅朗、高 正 龍、高橋康夫、西山良平、矢野建一（五十音順、敬称略）



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 遺跡の位置と環境	3
(2) 周辺の調査	6
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 第1面(鎌倉・室町時代)の遺構	7
(3) 第2面(平安時代)の遺構	18
(4) 第3面(飛鳥・奈良時代)の遺構	22
4. 遺 物	32
(1) 土器類	32
(2) 瓦類	37
(3) 木製品	39
(4) 石製品	39
5. ま と め	40
(1) 飛鳥・奈良時代の集落の様相	40
(2) 平安時代の遺構と「宇多院」	40
(3) 室町時代後期の遺構群の性格	46

図 版 目 次

巻頭図版1 遺構	1 井戸501(北東から)
	2 井戸501完掘状況(北東から)
巻頭図版2 遺構・遺物	1 土坑396 唾壺出土状況(西から)
	2 土坑396出土越州窯青磁唾壺
図版1 遺構	1 第1-1面全景(西から)
	2 堀1、井戸501(南東から)
図版2 遺構	1 掘立柱建物1(東から)
	2 掘立柱建物1 柱穴536(東から)
	3 掘立柱建物1 柱穴538(東から)

	4	塀1 柱穴561 (東から)
	5	塀1 柱穴1080 (北から)
図版3 遺構	1	柱列2 (南から)
	2	土坑581断面 (東から)
	3	土坑756断面 (東から)
	4	第1 - 2面全景 (北から)
図版4 遺構	1	第2面全景 (西から)
	2	掘立柱建物3 (北から)
図版5 遺構	1	掘立柱建物4 (北西から)
	2	掘立柱建物4 柱穴92断面 (南から)
	3	掘立柱建物4 柱穴715断面 (南から)
	4	第3面南半全景 (西から)
図版6 遺構	1	掘立柱建物5 (南南東から)
	2	掘立柱建物6 (南西から)
	3	溝1092 (西から)
	4	竪穴建物1093 (南南東から)
図版7 遺構	1	竪穴建物393 (西から)
	2	竪穴建物107 (西から)
	3	竪穴建物107床面土器出土状況
図版8 遺構	1	竪穴建物135 (北北西から)
	2	カマド400 (北西から)
	3	カマド400完掘状況 (北西から)
	4	溝1107 (北から)

挿 図 目 次

図1	調査位置と周辺遺跡 (1 : 10,000)	1
図2	調査前全景 (北東から)	2
図3	作業風景	2
図4	井戸501埋め戻し風景	2
図5	井戸501埋め戻し完了状況	2
図6	調査区配置図 (1 : 1,000)	3
図7	周辺調査位置図 (1 : 2,500)	4

図8	南半北壁断面図 (1 : 100)	8
図9	西壁断面図 (1 : 100)	9
図10	第1 - 1面平面図 (1 : 300)	10
図11	掘立柱建物1実測図 (1 : 50)	12
図12	掘立柱建物1 層名	13
図13	塀1、井戸501、土坑581・756実測図 (1 : 80)	14
図14	塀1、井戸501、土坑581・756 層名	15
図15	井戸501実測図 (1 : 50)	15
図16	柱列1・2実測図 (1 : 50)	16
図17	第1 - 2面平面図 (1 : 200)	17
図18	溝584～588・617断面図 (1 : 50)	18
図19	第2面平面図 (1 : 300)	19
図20	掘立柱建物3実測図 (1 : 80)	20
図21	掘立柱建物4実測図 (1 : 50)	21
図22	土坑182実測図 (1 : 50)	22
図23	土坑396実測図 (1 : 20)	22
図24	第3面平面図 (1 : 300)	23
図25	掘立柱建物5実測図 (1 : 50)	24
図26	掘立柱建物6～8実測図 (1 : 50)	25
図27	竪穴建物107実測図 (1 : 50)	26
図28	竪穴建物135実測図 (1 : 50)	27
図29	カマド400実測図 (1 : 20)	28
図30	竪穴建物393実測図 (1 : 50)	29
図31	溝1092・竪穴建物1093平面図 (1 : 100)	30
図32	溝1092・竪穴建物1093断面図 (1 : 50)	31
図33	中世土器実測図 (1 : 4)	33
図34	平安時代土器実測図 (1 : 4)	34
図35	奈良時代土器実測図 (1 : 4)	35
図36	瓦拓影および実測図 (1 : 4)	37
図37	井戸501出土木製品実測図 (1 : 4)	38
図38	石器実測図 (1 : 4)	39
図39	奈良時代遺構分布図 (1 : 2,500)	41
図40	平安時代前期前半遺構分布図 (1 : 2,500)	42
図41	平安時代前期後半から中・後期遺構分布図 (1 : 2,500)	43
図42	中世遺構分布図 (1 : 2,500)	46

表 目 次

表 1	主要周辺調査一覧表	5
表 2	遺構概要表	7
表 3	遺物概要表	32
表 4	土器一覧表	36

平安京右京北辺三坊六町跡

1. 調査経過

この調査は、京都市北区大將軍坂田町22番地で実施した立命館大学衣笠国際寮計画に伴うものである。調査地は、平安京右京北辺三坊六町にあたる。当町は、平安時代中期に右京北辺三坊五町から八町までの4町を占めたとされる宇多上皇の後院「宇多院」の南東部にも該当する。今回、当敷地に立命館大学の国際寮建設が計画された。工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という）が試掘調査を行ったところ、平安時代から室町時代の柱穴や溝が検出されたため、立命館大学に対し発掘調査の指導が行われ、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受けて調査を実施することとなった。調査は試掘調査と周辺の調査成果を受けて、宇多院関連の遺構を中心とした平安時代の遺構の検出とともに、平安京造営以前に営

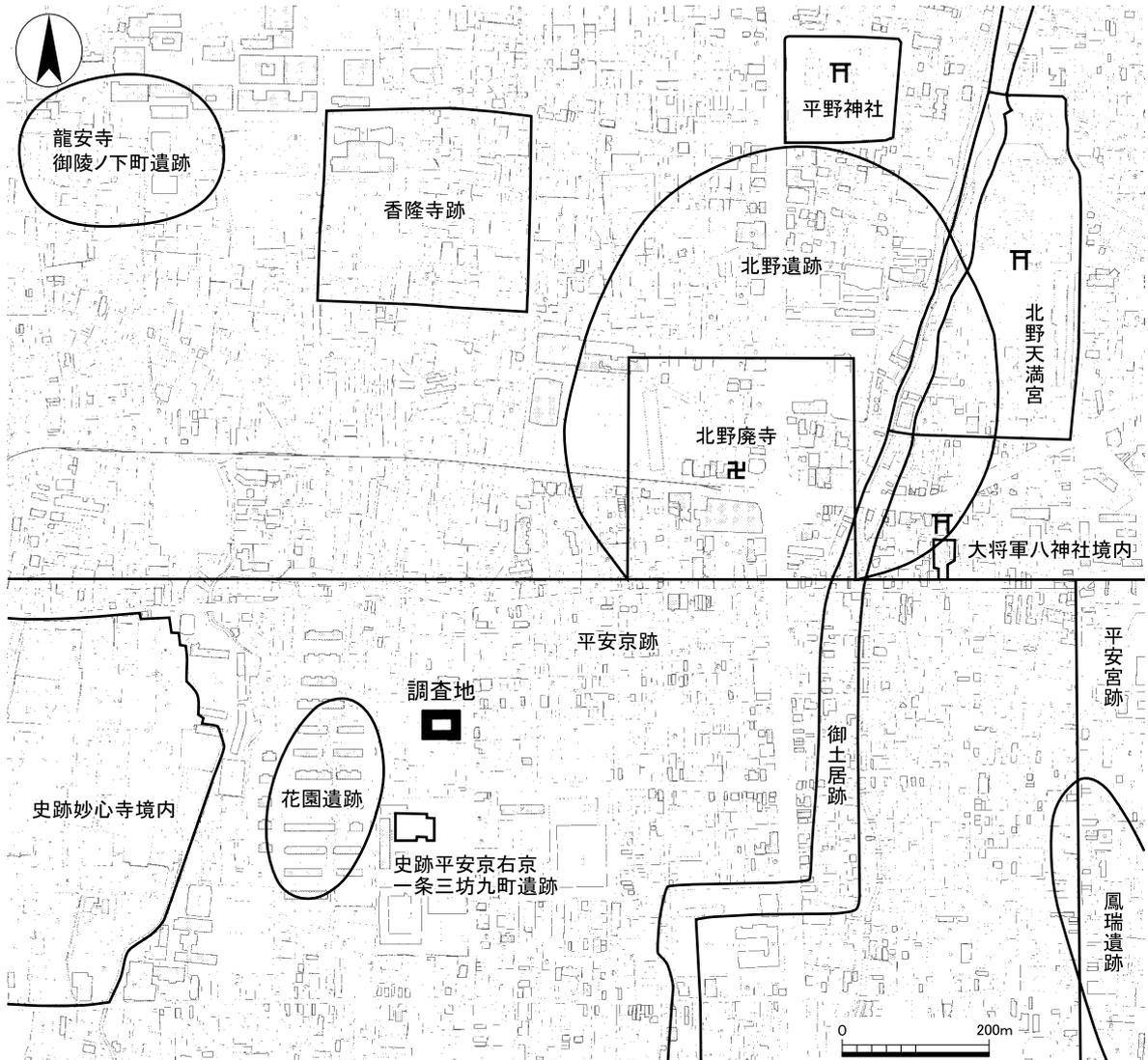


図1 調査位置と周辺遺跡 (1 : 10,000)



図2 調査前全景（北東から）



図3 作業風景



図4 井戸501埋め戻し風景



図5 井戸501埋め戻し完了状況

まれた集落の様相、さらには平安京廃絶以後の当地の利用状況を考古学的に解明することを目的とした。

発掘調査区は、文化財保護課の指導により、敷地東半に「口」の字形に設定した（図6）。調査面積は1,540㎡である。調査区内には、既存建物の基礎が残されていたため、それらを慎重に撤去しながら掘削を進めた。調査は遺構の帰属時期と性格を鑑み、3面に分けて実施した。第1面では鎌倉時代から室町時代の遺構群の調査を行い、鎌倉時代から室町時代前期の耕作に伴う溝群、室町時代後期の掘立柱建物、塀、石組井戸、柱列などを検出した。第2面では平安時代の遺構群の調査を行い、掘立柱建物、土坑などを検出した。第3面では飛鳥時代から奈良時代の遺構群の調査を行い、竪穴建物、溝などを検出した。それぞれの遺構面において記録作業を行い、各遺構面の調査時には文化財保護課の検査指導を受けた。

なお、2014年3月1日に現場公開を行い、約300名の参加を得ることができた。また、第1面で検出した室町時代後期の円形石組井戸は、京都市内では最大級の規模を持ち、現在でも湧水のある貴重な井戸であることから、立命館大学から現地保存したいとの要望が出されたため、湧水を妨げないよう、碎石を詰めた土嚢で埋め戻しを行った（図4・5）。今後の保存と活用方法については文化財保護課の指導に従うこととし、調査を終了した。

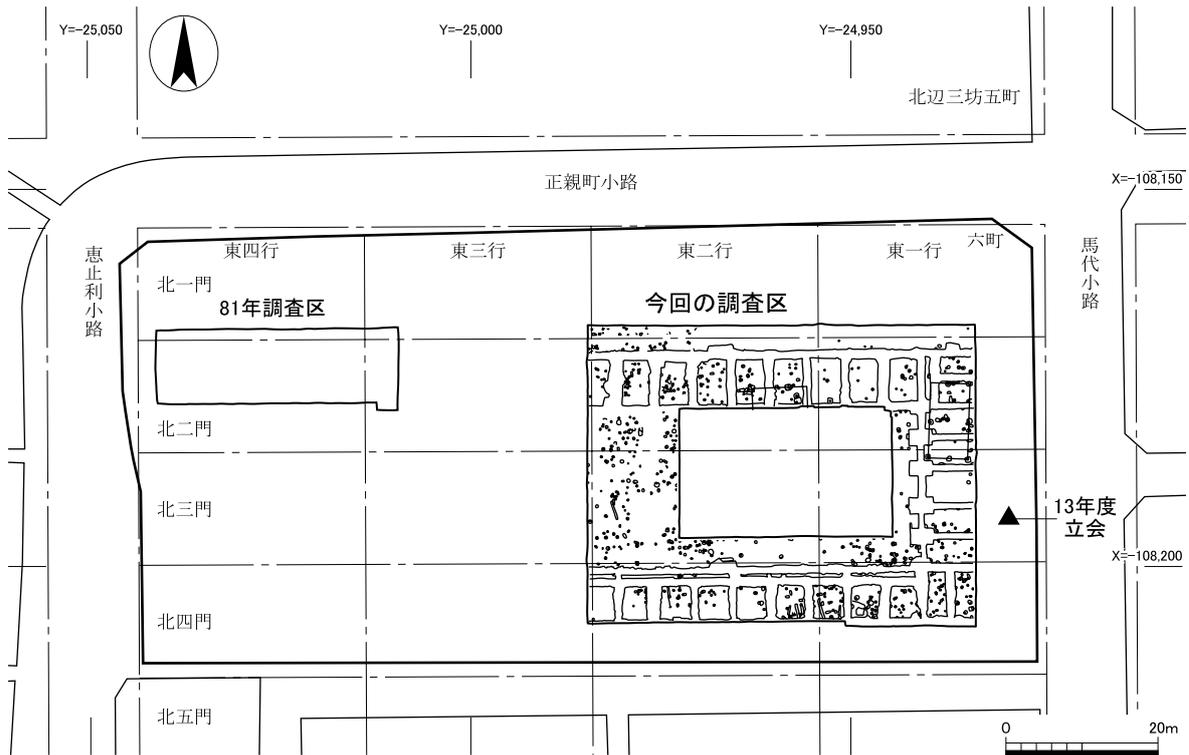


図6 調査区配置図 (1 : 1,000)

2. 位置と環境

(1) 遺跡の位置と環境 (図1)

調査地は、2011年に廃寮となった京都工芸繊維大学洛西寮の跡地で、現在の馬代通一条の交差点から約150m南に位置し、東は馬代通に面している。京都盆地の北西部に位置し、天神川扇状地の比較的安定した基盤層の上に立地する。当地周辺で人の生活痕跡が確認できるのは飛鳥時代に入ってからで、調査地西側には飛鳥時代から奈良時代の集落跡とされる花園遺跡がある。また、調査地の北東約500mには7世紀後半に建立された北野廃寺が位置する。

平安京遷都に伴い、当地は平安京右京北辺三坊六町に位置するようになる。南北朝時代に成立したとされる類書『拾芥抄』の付図「西京圖¹⁾」には、当町を含む右京北辺三坊五町から八町の4町に「左大臣 融領」「宇多院」との記入がある。また、『拾芥抄』本文には「宇多院 土御門北、木辻東、此小路當東洞院、法皇御所、刑部卿源湛宅云云、或抄云、西京宇多小路、但此小路当町尻東行」と記されている。これに従えば、調査地のある三坊六町は、左大臣源融の所領であったものをその子の源湛が受け継ぎ、その後宇多上皇の後院となった「宇多院」に含まれることになる。宇多上皇は昌泰2年(899)に落飾し、法皇となったのちも権勢を誇り、承平元年(931)に仁和寺御室で崩御する。その後、宇多院の領地がどのように渡ったかは不明である。

平安時代後期以降、右京域は衰退し耕地化が進んだとされる²⁾。調査地周辺でも平安時代後期から室町時代前半頃までの建物跡はほとんど見つかっていない。室町時代初期には調査地の西約500m

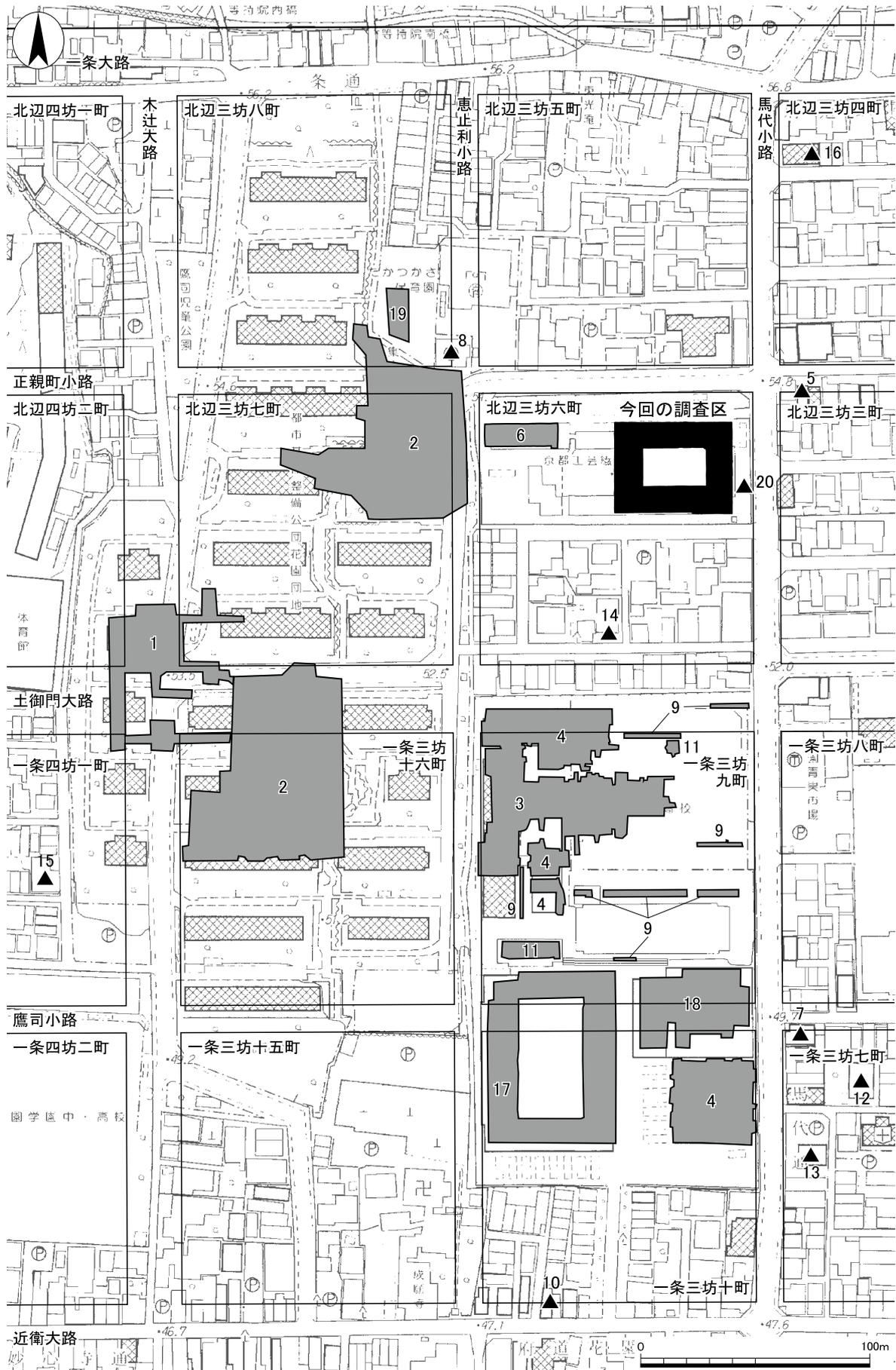


図7 周辺調査位置図 (1 : 2,500)

表1 主要周辺調査一覧表

番号	遺跡名：右京	所在地	調査年	方法	概要	文献
1	土御門大路・木辻大路	右京区花園鷹司町	1974	発掘	土御門大路北側溝か、木辻大路東側溝か、掘立柱建物1棟（中世か）	『埋蔵文化財発掘調査概報集 1976』鳥羽離宮跡調査研究所 1976年
2	北辺三坊七町・八町、一条三坊十六町	右京区花園鷹司町	1975	発掘	北辺三坊七町：正親町小路南側溝か、恵止利小路西側溝か、平安時代前期の掘立柱建物群 一条三坊十六町：奈良時代の堅穴建物群・掘立柱建物群、土御門大路北・南側溝か、平安時代前期の掘立柱建物群、中世の井戸	『埋蔵文化財発掘調査概報集 1976』鳥羽離宮跡調査研究所 1976年
3	一条三坊九町	北区大將軍坂田町	1979	発掘	飛鳥・奈良時代の堅穴建物群・掘立柱建物群・総柱建物、平安時代前期の掘立柱建物群、平安時代中期の掘立柱建物・井戸	『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』京都府教育委員会 1980年
4	一条三坊九町・十町	北区大將軍坂田町、右京区花園馬代町	1980	発掘	一条三坊九町：飛鳥・奈良時代の堅穴建物群・掘立柱建物、土御門大路南側溝、平安時代前期の掘立柱建物群・柵・溝、平安時代中期の井戸、中世の溝・土坑 一条三坊十町：奈良時代の掘立柱建物、平安時代前期の池、平安時代中期の掘立柱建物群	『埋蔵文化財発掘調査概報(1981-1)』京都府教育委員会 1981年
5	北辺三坊三町	北区大將軍南一条町	1981	立会	平安時代前期の遺物包含層、土坑3基	『京都市内遺跡試掘、立会調査概報 昭和56年度』京都市文化観光局 1982年
6	北辺三坊六町	北区大將軍坂田町	1981	発掘	恵止利小路東側溝、室町時代の掘立柱建物1棟	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1983年
7	一条三坊七町	中京区西ノ京御輿岡町	1983	立会	平安時代中期の溝	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
8	北辺三坊八町	北区大將軍坂田町	1983	立会	室町時代の土坑1基	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和58年度』京都市文化観光局 1984年
9	一条三坊九町	北区大將軍坂田町	1984	発掘	古墳時代の土坑、奈良時代の掘立柱建物、平安時代前期の掘立柱建物・溝	『京都府遺跡調査概報 第16冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1985年
10	一条三坊十町	右京区花園馬代町	1987	立会	近衛大路北側溝	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
11	一条三坊九町	北区大將軍坂田町	1987	発掘	飛鳥・奈良時代の堅穴建物、平安時代前期の掘立柱建物・溝	『京都府遺跡調査概報 第28冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 1988年
12	一条三坊七町	中京区西ノ京御輿岡町	1987	立会	平安時代前期の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 昭和62年度』京都市文化観光局 1988年
13	一条三坊七町	中京区西ノ京御輿岡町	1990	立会	平安時代の土坑	『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
14	北辺三坊六町	北区大將軍坂田町	1992	立会	室町時代の土坑	『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』京都市文化観光局 1993年
15	一条四坊一町	右京区花園猪ノ毛町	1992	立会	平安時代末期の柱穴	『京都市内遺跡立会調査概報 平成4年度』京都市文化観光局 1993年
16	北辺三坊四町	北区大將軍一条町	1996	立会	平安時代後期の整地層、室町時代の土坑	『京都市内遺跡立会調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年
17	一条三坊九町・十町	北区大將軍坂田町、右京区花園馬代町	1998・1999	発掘	一条三坊九町：鷹司小路北側溝、平安時代前期の門跡・築地内溝、平安時代中期以降の柱穴・土坑 一条三坊十町：奈良時代の掘立柱建物・溝、鷹司小路南側溝、平安時代前期の掘立柱建物・井戸、平安時代中期以降の掘立柱建物群・柵	『京都府遺跡調査概報 第92冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2000年
18	一条三坊九町・十町	北区大將軍坂田町、右京区花園馬代町	2002・2003	発掘	古墳時代の溝、鷹司小路南北側溝、平安時代前期の掘立柱建物	『京都府遺跡調査概報 第111冊』財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター 2004年
19	北辺三坊八町	北区大將軍坂田町、右京区花園馬代町	2006	発掘	平安時代後期～末の掘立柱建物・溝・井戸、室町時代の掘立柱建物・井戸	『平安京右京北辺三坊八町(宇多院)跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年
20	北辺三坊六町	北区大將軍坂田町	2013	立会	馬代小路西側築地内溝（室町時代とそれ以前の2時期あり）	『京都市内遺跡詳細分布調査報告 平成25年度』京都市文化市民局 2014年

の地に花園上皇の発願で妙心寺が創建されている。また、中世を通して主に酒麴の利権をめぐって活発な政治・商業活動を行っていた北野社³⁾が北東に位置する。明応9年(1500)に、北野社が調査地のある大將軍付近の巷所について調査しており、その後「大將軍保」として北野社の支配を受けることとなったようである。また、調査地の約500m東には、天正19年(1591)に豊臣秀吉によって築かれた御土居跡が南北にはしる。

(2) 周辺の調査(図7、表1)

調査地周辺では、多数の調査が行われている。遺構が出土した調査について、図7と表1にまとめた。その中でも、日本住宅公団花園鷹司団地(以下「花園団地」という)の建設や京都府立山城高等学校(以下「山城高校」という)の改築に伴って比較的大規模な発掘調査が実施され、大きな成果が上がっている。1974から1975年にかけて実施された花園団地建設に伴う調査では、北辺三坊七町跡で平安京の条坊側溝とされる溝や平安時代前期の掘立柱建物・柱列などが検出されている。また、一条三坊六町跡では、奈良時代に遡るとされる整然と並ぶ大型建物群が検出され、山城国葛野郡衙の候補地に挙げられたが、これについては出土遺物や建物構造の再検討から平安時代前期のものとする説が有力となっている⁵⁾。1979から1980年にかけて実施された山城高校1～5次調査では、一条三坊九町跡で平安時代前期の大規模な建物群が検出されている。1町分の敷地を占有し、中心建物をコの字形に囲む建物配置や建物群南側の四脚門の存在から、いわゆる寝殿造の邸宅の初源形態として注目された。建物群の中心部分は1983年に京都府の史跡に指定され、地中保存されている。山城高校の改築に伴う調査はその後10次調査まで実施されており、飛鳥時代から奈良時代の竪穴建物・掘立柱建物や平安京の条坊関連遺構、平安時代の掘立柱建物・池などが見つかっている。

また、今回の調査と同じ敷地内では1981年に発掘調査が行われており、平安京の恵止利小路東側溝と室町時代の掘立柱建物1棟が検出されている。さらに、2013年には同敷地内で立会調査が行われ、室町時代とそれ以前の2時期の馬代小路西側溝が見つかっている。

註

- 1) 『改定増補 故実叢書22巻 禁秘抄考註・拾芥抄』明治図書出版株式会社 1993年
- 2) 山田邦和「第三章 左京と右京 1 平安京の概要」『平安京提要』角川書店 1994年
- 3) 『史料京都の歴史 4 市街・生業』平凡社 1981年
- 4) 「大將軍村」『史料京都の歴史 第6巻 北区』平凡社 1993年
- 5) 杉山信三・鈴木広司「V 総括」『埋蔵文化財発掘調査概報集1976』鳥羽離宮跡調査研究所 1975年
- 6) 網 伸也・柏田有香「京都府花園遺跡・西京極遺跡」『日本古代の郡衙遺跡』雄山閣 2009年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図8・9)

調査地は現状では現代盛土のためほぼ平坦になっており、標高は53.8～54.0mである。現地表面から0.1～0.25mが現代盛土で、その下に近代耕作土とその床土が0.15～0.4m堆積する。調査区西南部では、その下に中世の遺物包含層が0.05～0.1mの厚さで堆積している(図8-4層、図9-9層)。中世の遺物包含層を除去すると暗褐色シルトを主体とする基盤層となる(図9-11～14層)。暗褐色シルトの基盤層の下には、土壌化が進んだいわゆる黒ボク層が堆積している(図9-15層)。調査区東半は、近代耕作土直下が暗褐色シルトを主体とする基盤層となる(図8-5・6層)。その下に西半と同じく黒ボク層が見られる(図8-10～12層)が、調査区南東部では耕作土直下が黒ボク層、あるいは黒ボク層を削平して堆積する砂礫層となり、この上面で遺構を確認している。基盤層上面の標高は調査区北半で約53.7m、南東部で約53.4m、南西部では約53.2mで北東から南西に向かって低くなる。南東部にのみ見られる中世遺物包含層は、この高低差を均したものと考えられる。

調査は、遺構の帰属時期から第1面(鎌倉・室町時代)、第2面(平安時代)、第3面(飛鳥・奈良時代)の3面に分けて行った。室町時代後期の遺構は遺物包含層上面で、鎌倉時代から室町時代前期の遺構は遺物包含層を除去して検出したため、前者を第1-1面、後者を第1-2面とした。以下に、各面の主要な遺構について概説する。

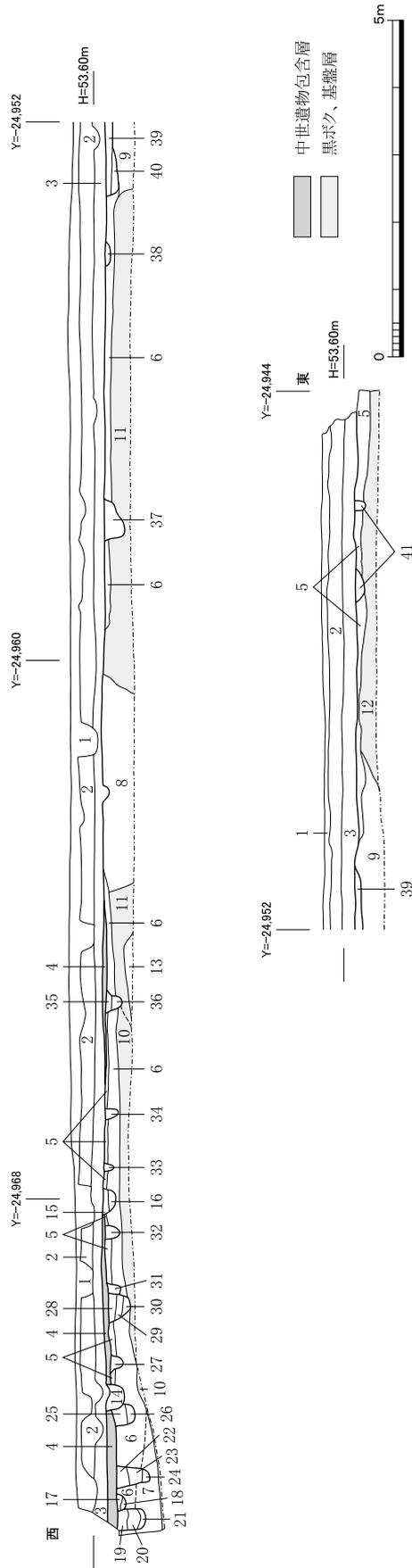
(2) 第1面(鎌倉・室町時代)の遺構

1) 第1-1面(図10、図版1-1)

第1-1面では、調査区西半で掘立柱建物1、堀1、井戸501などを検出した。出土遺物から同時期に機能した一連の遺構群である可能性が高い。他に、耕作に伴う東西方向の溝をほぼ全域で検出した。掘立柱建物の柱穴を削平することから、建物廃絶後の溝群と考えられる。

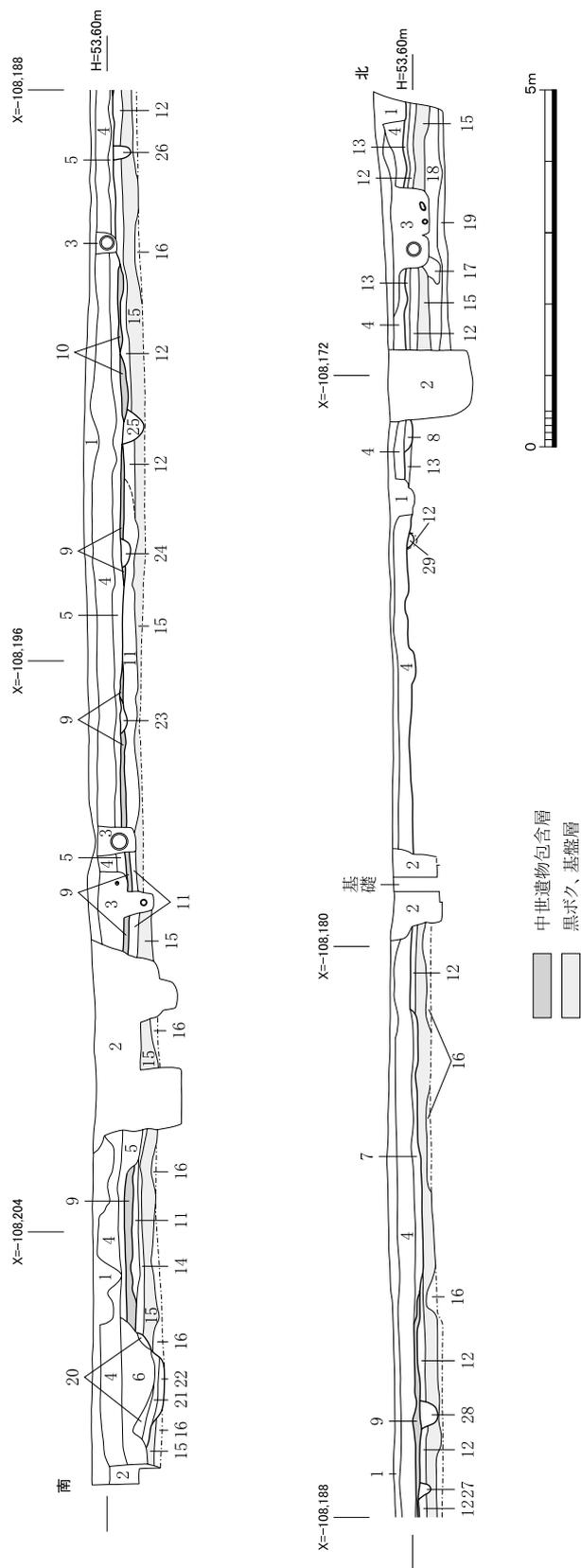
表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
飛鳥時代～奈良時代	竪穴建物107・135・393・1093、掘立柱建物5～8、溝1092・1107、土坑195	第3面
平安時代	掘立柱建物3・4、土坑182・396、柱穴100・205・402	第2面 土坑396は唾壺埋納遺構
鎌倉時代	溝584・585・587～589・617・629～631・648・655・657・658・821	第1-2面 耕作関連溝群
室町時代	溝586	第1-2面 室町時代前期の耕作関連溝か
	掘立柱建物1、堀1、柱列1・2、井戸501、土坑581・756	第1-1面 室町時代後期



- | | | | |
|-----------------|------------------|-------------------|----------------|
| 1 現代盛土 | 21 10YR5/6黄褐色 | シルト～細砂に10YR2/2黒褐色 | シルト～細砂のブロック少量混 |
| 2 10YR4/3にぶい黄褐色 | 22 10YR2/2黒褐色 | シルト～細砂 | 粗砂混 |
| 3 10YR5/2灰黄褐色 | 23 10YR3/3暗褐色 | シルト～細砂 | |
| 4 10YR2/2黒褐色 | 24 10YR5/6黄褐色 | 細砂に10YR3/1黒褐色 | 粘上ブロック少量混 |
| 5 10YR3/3暗褐色 | 25 10YR2/2黒褐色 | シルト～細砂に10YR5/6黄褐色 | シルトブロック中量混 |
| 6 10YR4/3にぶい黄褐色 | 26 10YR2/2黒褐色 | シルト～細砂に10YR5/6黄褐色 | シルトブロック少量混 |
| 7 10YR4/3にぶい黄褐色 | 27 10YR3/2黒褐色 | シルト～細砂 | 粗砂混 |
| 8 10YR4/2灰黄褐色 | 28 10YR2/2黒褐色 | シルト～細砂 | 粗砂混 |
| 9 10YR4/4褐色 | 29 10YR3/3暗褐色 | シルト～細砂 | |
| 10 10YR2/2黒褐色 | 30 10YR5/6黄褐色 | シルト～細砂に10YR2/2黒褐色 | シルト～細砂のブロック少量混 |
| 11 10YR2/2黒褐色 | 31 10YR2/2黒褐色 | シルト～細砂に10YR5/6黄褐色 | シルトの大ブロック少量混 |
| 12 10YR2/1黒色 | 32 10YR3/2黒褐色 | シルト | 粗砂混 |
| 13 10YR3/2黒褐色 | 33 10YR3/2黒褐色 | シルト～細砂 | |
| 14 10YR3/2黒褐色 | 34 10YR2/2黒褐色 | シルト～細砂 | 粗砂混 |
| 15 10YR2/2黒褐色 | 35 10YR3/2黒褐色 | シルト～細砂 | |
| 16 10YR2/2黒褐色 | 36 10YR4/3にぶい黄褐色 | シルト～細砂 | 粗砂混 |
| 17 10YR2/2黒褐色 | 37 10YR2/3暗褐色 | シルト～細砂 | 粗～極粗砂少量混 |
| 18 10YR2/2黒褐色 | 38 10YR3/3暗褐色 | シルト～細砂 | シルトブロック少量混 |
| 19 10YR2/2黒褐色 | 39 10YR2/2黒褐色 | シルト～細砂 | 粗～極粗砂少量混 |
| 20 10YR2/2黒褐色 | 40 10YR3/2黒褐色 | シルト～細砂 | 小礫少量混 |
| | 41 10YR2/2黒褐色 | シルト～細砂 | 粗砂混 |

図8 南半北壁断面図 (1 : 100)



- | | | |
|-----------------|------------------|-----------------------------|
| 1 現代盛土 | 16 10YR3/4暗褐色 | シルト～細砂(基盤層) |
| 2 既存建物基礎 | 17 10YR1.7/1黒色 | シルト 粘質(植物痕) |
| 3 埋設管 | 18 10YR2/3黒褐色 | シルト(やや土壌化した基盤層) |
| 4 10YR4/3にぶい黄褐色 | 19 2.5Y7/3浅黄色 | 極細砂～細砂(基盤層) |
| 5 10YR5/2灰黄褐色 | 20 10YR3/2黒褐色 | シルト～細砂 粗～極粗砂少量混(奈良時代 溝1092) |
| 6 10YR5/2灰黄褐色 | 21 10YR2/2黒褐色 | シルト 粗砂少量混(奈良時代 溝1092) |
| 7 10YR4/3にぶい黄褐色 | 22 10YR2/2黒褐色 | シルト やや粘質(奈良時代 溝1092) |
| 8 10YR3/2黒褐色 | 23 10YR5/2灰黄褐色 | シルト～細砂 極粗砂少量混 |
| 9 10YR2/2黒褐色 | 24 10YR2/2黒褐色 | シルト 粗砂混 炭化物少量混(中世耕作溝) |
| 10 10YR2/3暗褐色 | 25 10YR2/2黒褐色 | シルト やや粘質 |
| 11 10YR3/3暗褐色 | 26 10YR3/3暗褐色 | シルト |
| 12 10YR3/3暗褐色 | 27 10YR2/3黒褐色 | シルト～細砂 |
| 13 10YR3/3暗褐色 | 28 10YR3/3暗褐色 | シルト 粗砂少量混 |
| 14 10YR3/3暗褐色 | 29 10YR4/3にぶい黄褐色 | シルト(溝) |
| 15 10YR2/2黒褐色 | | |

図9 西壁断面図 (1:100)

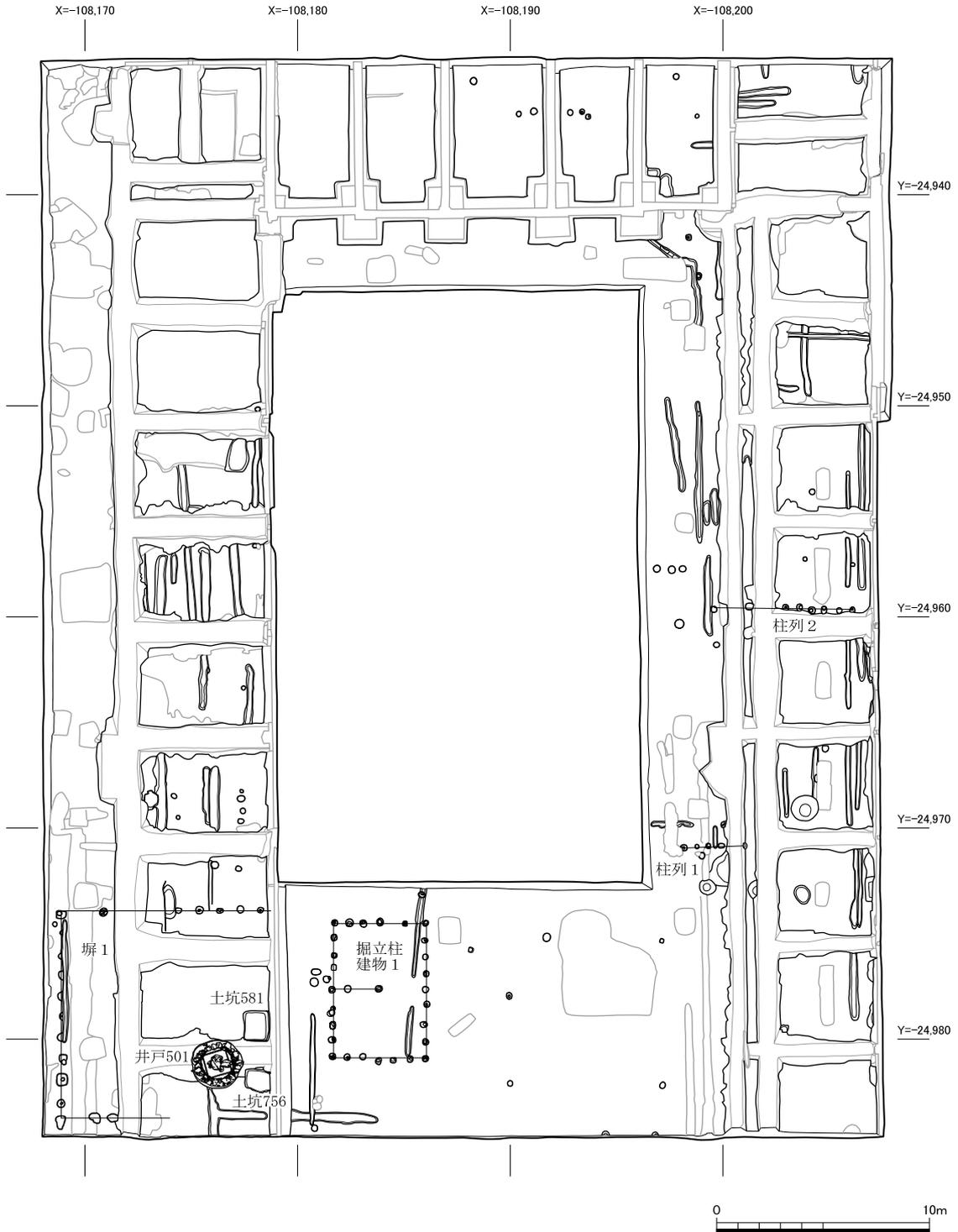


图10 第1-1面平面图(1:300)

掘立柱建物 1（図11・12、図版2-1） 調査区西半で検出した。東西棟の建物で、梁行は東辺が5間、西辺が6間、桁行は南北辺とも8間の建物である。方位はほぼ正方位を向く。柱間は東辺の柱穴535・536間が約1.2mあるが、それ以外は0.6～0.9mと狭い。柱穴535・536間は入口と推測される。桁行のほぼ中央には間仕切と考えられる柱穴519・520が並ぶ。この柱間は約1.4mある。柱掘形は不整形ないしは隅丸方形で径0.2～0.35m、深さは検出面から0.05～0.35mある。柱痕跡が残るものから推測される柱径は0.05～0.1mある。礎石を持つものと持たないもの、柱の周りを栗石で根巻きするものが混在する。また、礎石を持つものの中でも、掘形の最下部に礎石が座るもの（柱穴516・526など）は少なく、掘形の中位に礎石が座るものが多い。後者は修復に伴う柱の据え換え時に据えられた礎石である可能性が高い。また、柱穴508では礎石の下に柱痕跡が認められることや（図11-62層）、柱穴509・510の切り合い関係も柱の据え換えを示唆するものである。建物を構成する柱穴埋土からは15世紀末から16世紀半ば頃の遺物が少量出土した。

堀 1（図13・14、図版1-2） 調査区北西部で検出した。柱穴がコの字状に並ぶ。北柱筋では10間分、東柱筋では推定8間分、西柱筋では2間分の柱穴を検出した。南の柱筋は検出していないが、南西部に同時期の遺構である井戸501が位置し、これを囲う堀と考えられる。柱間は柱穴561・1086間が約1.2m、それに西面する柱穴789・802間が約1.0mであるほかは、0.5～0.6mと狭い。柱掘形は不整形ないしは隅丸方形で、径0.15～0.35m、深さは0.05～0.4mある。柱痕跡が残るものから推測される柱径は0.05～0.15mある。柱穴789・802は柱抜き取りの痕跡が認められる。礎石を持つものと持たないものが混在する。堀を構成する柱穴からは16世紀半ば頃の遺物が出土した。

井戸501（図13・15、巻頭図版1） 調査区北西部、堀1の南西部で検出した。平面円形の石組井戸である。上部約1mは既存建物の基礎で壊され西側の一部の石組しか残っていなかったが、それより下は石組みが完全に残る。検出面での掘形の直径は約2.4mで、石組部分は外法径が約2.2m、内法径が約1.5mある。井戸枠内埋土は、ほぼ土を含まず、径0.05m程度の栗石が詰まる。それを除去し、検出面から約3.9mの深さで、径0.05m以下の小礫が敷かれた井戸底を検出した。

礫敷き上には方形の木枠が据えられる。木枠は長さ1.1～1.2m、幅約0.2m、厚さ0.02～0.06mの4枚の木材を方形に組み合わせたもので、ホゾなどの加工はなく、小口を別の板に押し当て、角に乗せた石の重さで固定していると考えられる。各木材には鑿跡が明瞭に残る。木枠の剥片の可能性のある木片11点の樹種鑑定を行ったところ、7点がスギ、2点がモミ、2点が広葉樹であった。木枠の方位は北に対して約15度西に振れる。先述したように、木枠の4隅が石組の下に入り込むことから、掘形を掘ったのち、底に礫を敷き、木枠を据えてから石組みを組んでいったと考えられる。木枠中央には、径0.2～0.3mのチャート6石の間に小礫を詰めた根石の上に長径が約0.7mある巨石2石が座る。2石はいずれもチャートで、北側の石は白色系、南側の石は赤色系である。長辺が直口するようにT字状に据えられ、平坦面を上に向ける。巨石2石はいずれも根石を用いて上面をほぼ水平（標高49.96～49.99m）に揃えることから、意図的に据えられたものと考えられる。また、据え付け時の可動域を考慮すると、やはり木枠と同様、井戸側の石組みを組む前に据えられ

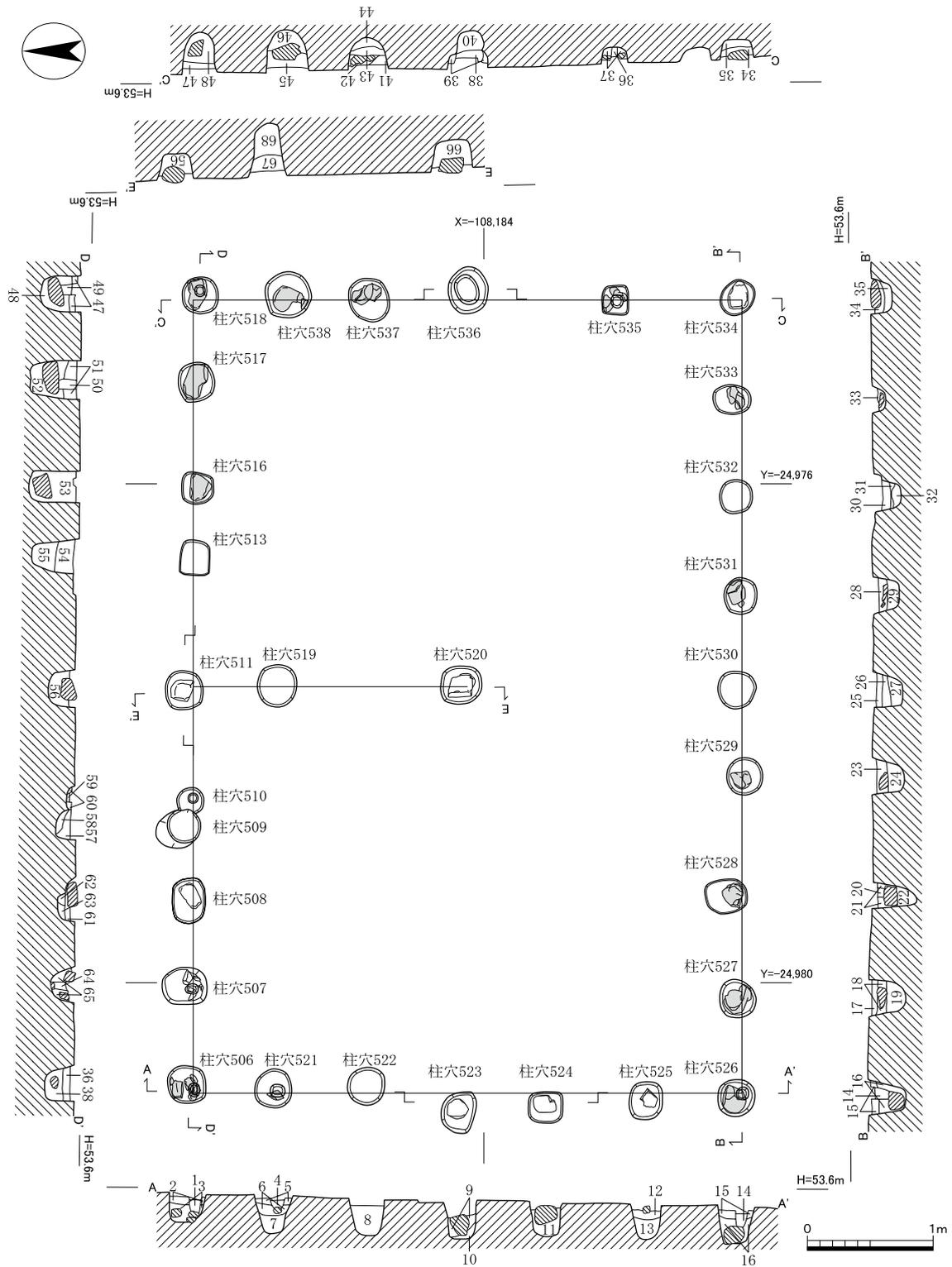


図11 掘立柱建物1実測図 (1 : 50)

1	10YR2/2黒褐色	シルト 粘質	36	10YR3/1黒褐色	シルト～細砂
2	10YR4/2灰黄褐色	シルト～細砂 φ1～5cmの礫少量混	37	10YR4/1褐灰色	シルト～細砂 φ1～5cmの礫混
3	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂	38	10YR4/1褐灰色	シルト～細砂に10YR6/6明黄褐色 シルトブロック混
4	10YR3/2黒褐色	シルト	39	10YR3/2黒褐色	シルト 粗砂少量混
5	10YR4/1褐灰色	シルト～細砂 粗砂混、炭化物少量混	40	10YR4/1褐灰色	シルト～細砂 粗砂混 炭化物混
6	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂 φ1～2cmの礫少量混	41	10YR3/2黒褐色	シルト
7	10YR4/2灰黄褐色	シルト～細砂 粗砂混	42	10YR3/1黒褐色	シルト～細砂
8	10YR4/2灰黄褐色	シルト～細砂 炭化物少量混	43	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂
9	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂 やや粘質	44	10YR3/1黒褐色	シルト～細砂に10YR6/6明黄褐色 シルトブロック多量混
10	10YR2/2黒褐色	シルト～細砂 炭化物少量混	45	10YR4/1褐灰色	シルト～細砂に10YR6/6明黄褐色 シルトブロック混
11	10YR4/2灰黄褐色	シルト～細砂 粗砂混	46	10YR3/2黒褐色	シルト 粗砂混
12	10YR4/2灰黄褐色	シルト～細砂 炭化物少量混	47	10YR4/1褐灰色	シルト～細砂 炭化物少量混
13	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂 やや粘質	48	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂 小礫少量混
14	10YR2/1黒色	シルト 炭化物少量混	49	10YR3/1黒褐色	シルト
15	10YR4/1褐灰色	シルト～細砂 小礫少量混	50	10YR3/1黒褐色	シルト 炭化物少量混
16	10YR3/1黒褐色	シルト～細砂 φ1～2cmの礫少量混	51	10YR3/3暗褐色	シルト～細砂
17	10YR4/1褐灰色	シルト～細砂 粗～極粗砂混	52	10YR3/1黒褐色	極細～細砂
18	10YR3/1黒褐色	細砂	53	10YR4/2灰黄褐色	シルト～細砂に 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロック多量混
19	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂	54	10YR4/2灰黄褐色	シルト～細砂に 10YR6/6明黄褐色シルトの小ブロック多量混 炭化物少量混
20	10YR3/1黒褐色	シルト～細砂	55	10YR2/2黒褐色	シルト～細砂
21	10YR4/3にぶい黄褐色	シルト～細砂	56	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂 炭化物少量混
22	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂	57	10YR4/2灰黄褐色	シルト～細砂 粗砂混
23	10YR4/2灰黄褐色	シルト～細砂 炭化物少量混	58	10YR3/1黒褐色	シルト～細砂
24	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂	59	10YR3/1黒褐色	シルト 炭化物少量混
25	10YR4/1褐灰色	シルト～細砂 φ1～2cmの礫少量混	60	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂
26	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂	61	10YR4/2灰黄褐色	シルト～細砂
27	10YR3/2黒褐色	細砂	62	10YR3/1黒褐色	シルト
28	10YR4/1褐灰色	シルト～細砂 小礫少量混	63	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂
29	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂 炭化物少量混	64	10YR3/1黒褐色	シルト
30	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂に 10YR5/4にぶい黄褐色 シルトブロック多量混	65	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂 根固め石詰まる
31	2.5Y4/2暗灰黄色	シルト～細砂	66	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂
32	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂 やや粘質	67	10YR4/2灰黄褐色	シルト～細砂 小礫・炭化物少量混
33	10YR4/2灰黄褐色	シルト～細砂 粗砂混 炭化物少量混	68	10YR3/3暗褐色	細砂 粗砂混
34	10YR4/1褐灰色	シルト～細砂 粗砂混			
35	10YR3/2黒褐色	シルト～細砂			

図12 掘立柱建物1 層名

たと推測される。

井戸側の石組みは、下から2段分はほぼチャートで構成される。それより上はチャートと砂岩系の石材が混在する。底から検出面までほぼ垂直に立ち上がる。石の大きさは、下位と上位では径0.5～1.2m程度の比較的大きな石材が用いられ、中位では径0.15～0.3mのものが多用される。

この井戸501は、現在でも湧水のある井戸である。水は東面と西面から湧いており、西面の方が水量は多い。西面は標高50.25m、東面は50.1mで湧水がある。汲み上げない場合、底から約1.5m、標高51.0m程度まで常に水が溜まっている状態であった。

埋土の栗石からはほとんど遺物が出土せず、底の木枠内から15世紀後半から16世紀初頭と考えられる土器や木製品が出土した。なお、井戸は現地に保存されることになったため、裏込めの状況や構築時期は不明である。

土坑581・756（図13・14、図版3-2・3） 調査区北西部、井戸501の南で土坑2基を検出した。形状、埋土の状況から見て、対になる土坑と考える。東側の土坑581は、平面形は隅丸長方形で長辺が約1.4m、短辺は約1.1mある。西側の土坑756は南端は攪乱を受ける。平面形はやや歪な隅丸長方形で、残存長は東西約1.2m、南北約1.0mある。2基ともに平坦な底から壁が垂直に立ち上がり、断面形は方形を呈する。深さは土坑581が約0.65m、土坑756が約0.55mある。いずれも同様のブロックが混じる土で埋まり、同時に人為的に埋め戻されたと考えられる。埋土からは土師器皿や焼締陶器備前産播鉢、常滑産甕、輸入陶磁器青磁皿など15世紀末から16世紀前半頃の遺物の小片が出土した。

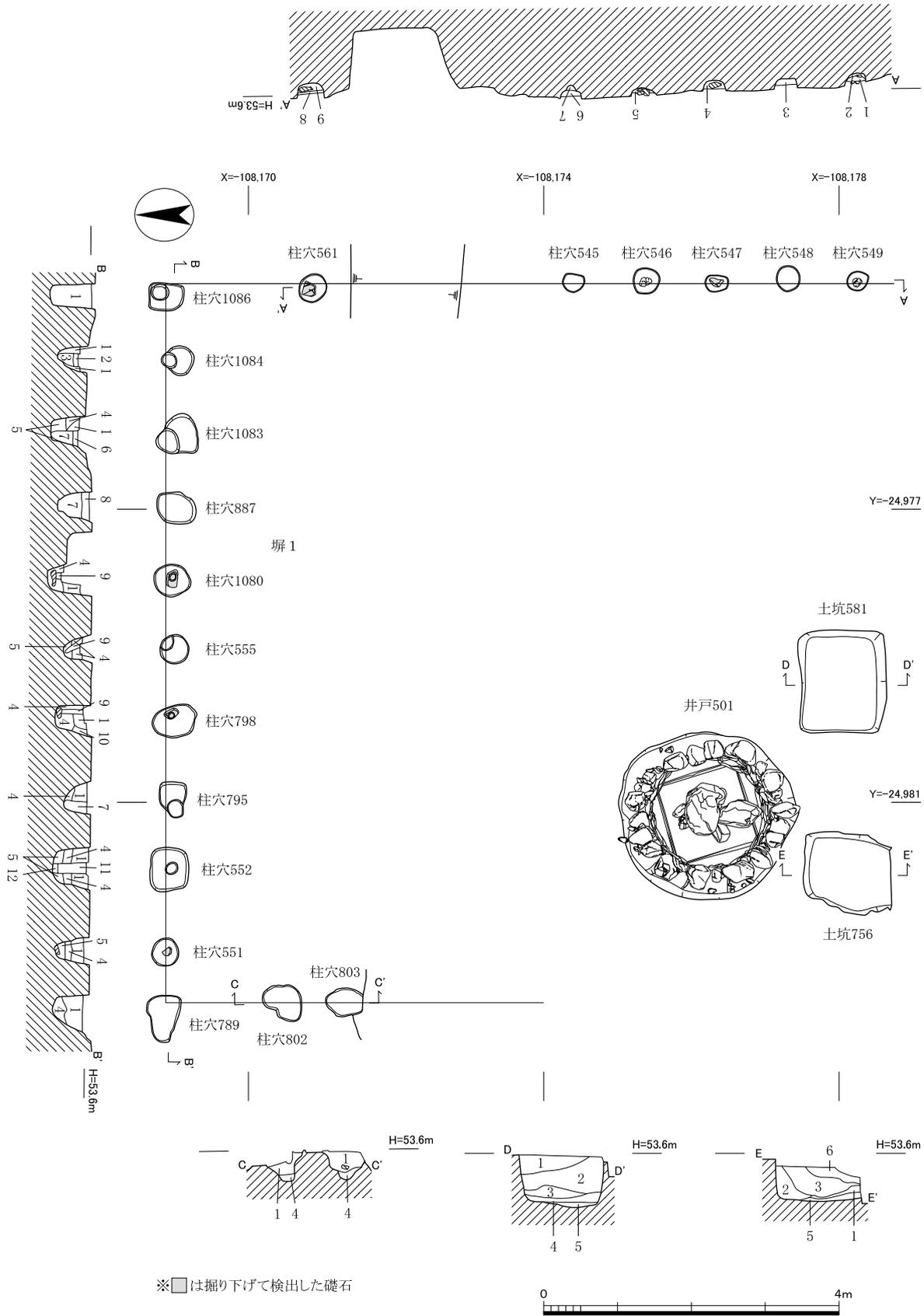


図13 塀1、井戸501、土坑581・756実測図（1：80）

Aライン

- 1 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 粗砂混
- 2 10YR4/4褐色 細砂 10YR6/6明黄褐色 シルトブロック混
- 3 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 粗砂、φ4～5cmの礫少量混
- 4 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 粗砂混
- 5 10YR4/4褐色 シルト 10YR6/6明黄褐色 シルトブロック多量混
- 6 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト～細砂 小礫少量混

- 7 10YR3/1黒褐色 細砂
- 8 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 10YR6/6明黄褐色 シルトブロック多量、炭化物少量混
- 9 10YR4/1褐灰色 シルト～細砂 10YR6/6明黄褐色 シルトブロック多量混

B・Cライン

- 1 10YR2/1黒色 シルトと10YR5/6黄褐色 シルトと10YR4/2灰黄褐色 細砂の各ブロックが混じる
- 2 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
- 3 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂
- 4 10YR2/1黒色 シルトに10YR5/6黄褐色 シルトブロック少量混
- 5 10YR2/1黒色 シルト やや粘質
- 6 10YR4/1褐灰色 シルト～細砂 炭化物少量混

- 7 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 10YR6/6明黄褐色 シルトブロック多量混
- 8 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂
- 9 10YR3/3暗褐色 細砂に10YR5/6黄褐色 シルトブロック少量混
- 10 10YR2/1黒色 シルトに10YR5/6黄褐色 シルトの小ブロック少量混
- 11 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 粗砂混
- 12 10YR3/3暗褐色 細砂

D・Eライン

- 1 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂に10YR4/4褐色 シルトブロック少量、小礫少量混
- 2 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂に10YR8/3浅黄橙色 シルトと10YR5/4にぶい黄褐色 シルトと10YR4/1褐灰色 シルト～細砂のブロック多量混

- 3 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂と10YR5/4にぶい黄褐色 シルトのブロックが混じる
- 4 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 粗砂混
- 5 10YR5/2灰黄褐色 粘土～シルト 粘質
- 6 10YR4/2灰黄褐色 シルト～細砂 小礫少量混

図14 堀1、井戸501、土坑581・756 層名

柱列1 (図16) 調査区南西部で検出した南北方向の柱列である。南北4間分を検出した。方位は北に対して約2度西に振れる。柱穴731と柱穴1024間が攪乱を受けるため、本来は5間あったと考えられ、柱間は0.5～0.7mと推測される。柱掘形は円形もしくは隅丸方形で径0.2～0.3m、深さは0.1～0.3mある。柱穴728・730は礎石が座る。時期を判別できる遺物は出土しなかったが、埋土が灰黄褐色シルト～細砂を主体とし、掘立柱建物1・堀1と共通することから同時期と判断した。

柱列2 (図16、図版3-1) 調査区南半中央で検出した南北方向の柱列である。南北7間分を検出した。方位はほぼ正方位を向く。攪乱を受けるため、本来は9間あったと考えられ、柱間は0.5～0.8mと推測される。柱掘形は円形もしくは隅丸方形で、径0.2～0.4m、深さは0.1～0.25mある。柱列1と同様に埋土は灰黄褐色シルト～細砂が主体となる。

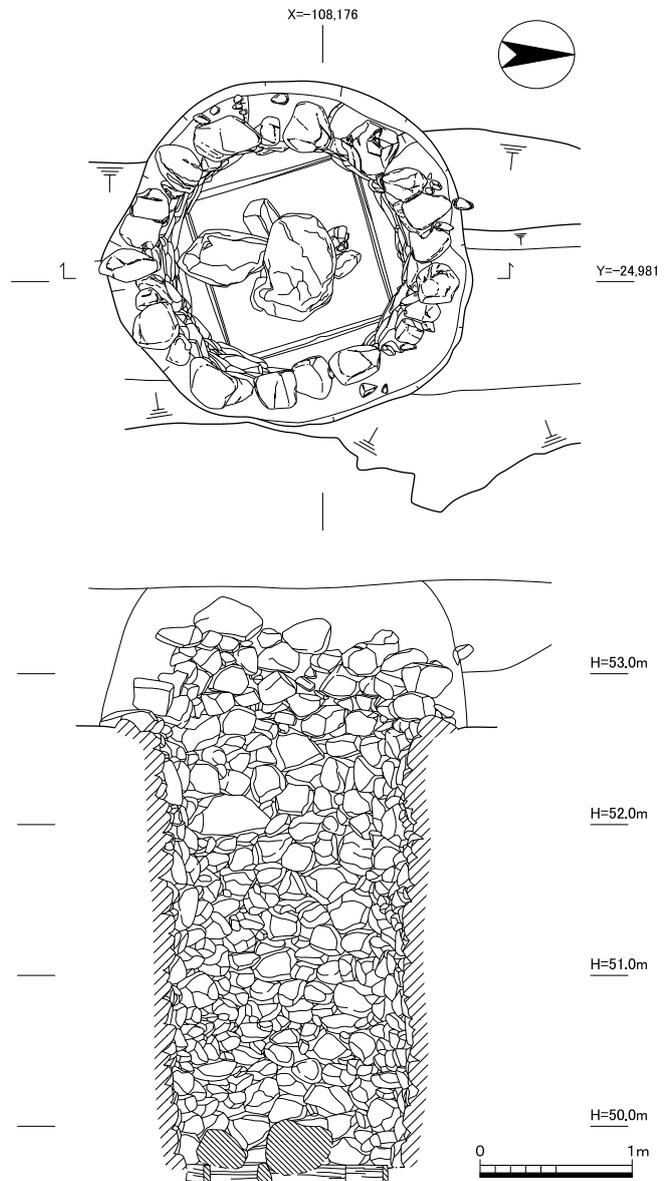


図15 井戸501実測図 (1:50)

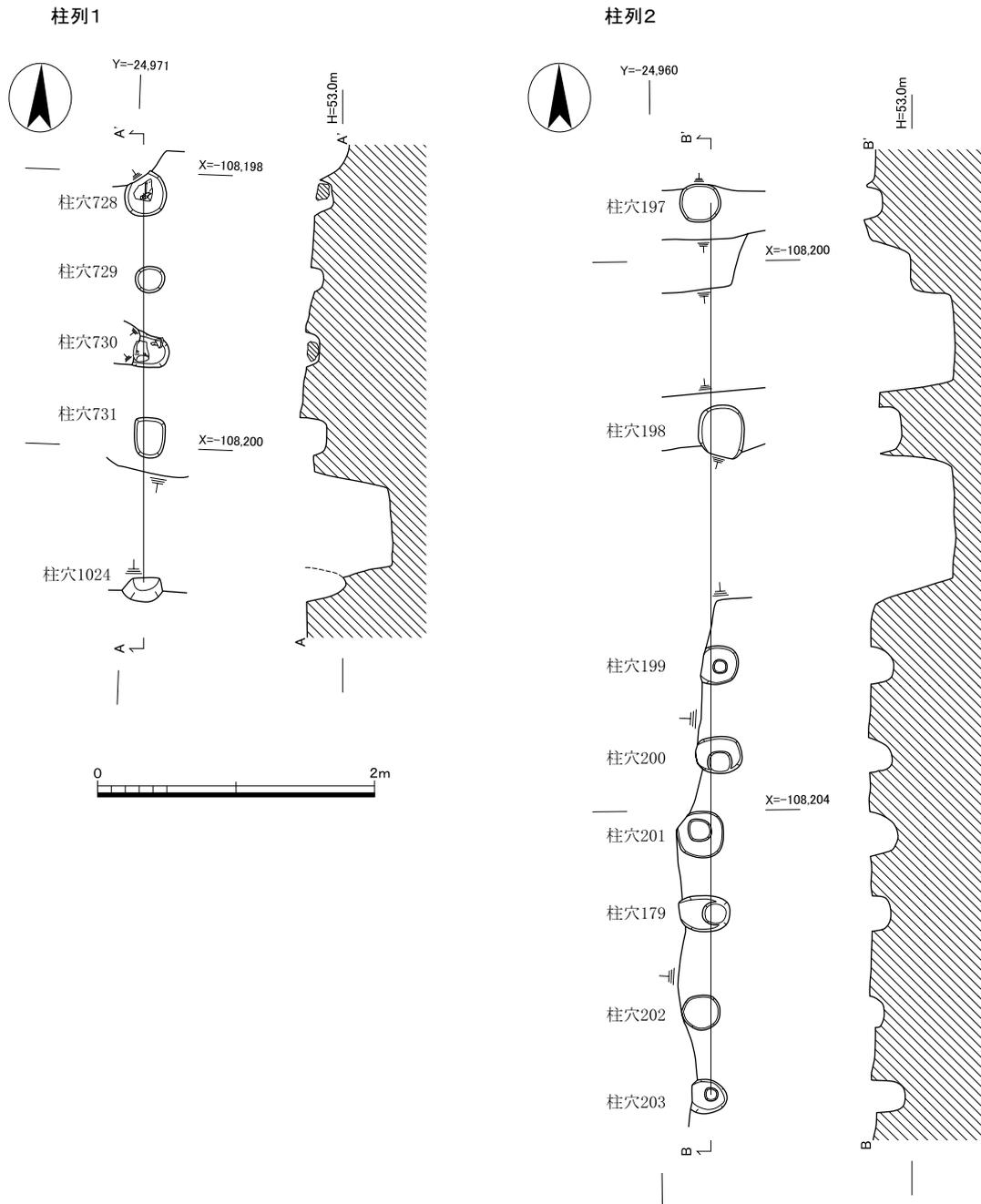


図16 柱列1・2実測図（1：50）

2) 第1-2面（図17、図版3-4）

第1-2面では、調査区西半で多数の溝を検出した。重複関係、方向から3時期に分けることができる。

溝586（図18） この面では最も新しいと考えられる南北方向の溝である。検出長は約39mで、南北ともに調査区外に延びる。主軸方位は北に対して約2度西に振れる。幅0.6～1.0m、深さは0.3～0.6mあり、底は平坦で断面形は方形を呈する。底面の標高は北端で53.35m、南端で52.7mで、北から南に低くなる。埋土は、最下層の黒色・黒褐色シルト層（図18 Aライン4層、Bライン5層）は溝機能時の堆積であると考えられるが、それより上は明黄褐色シルトのブロックを含む黒褐

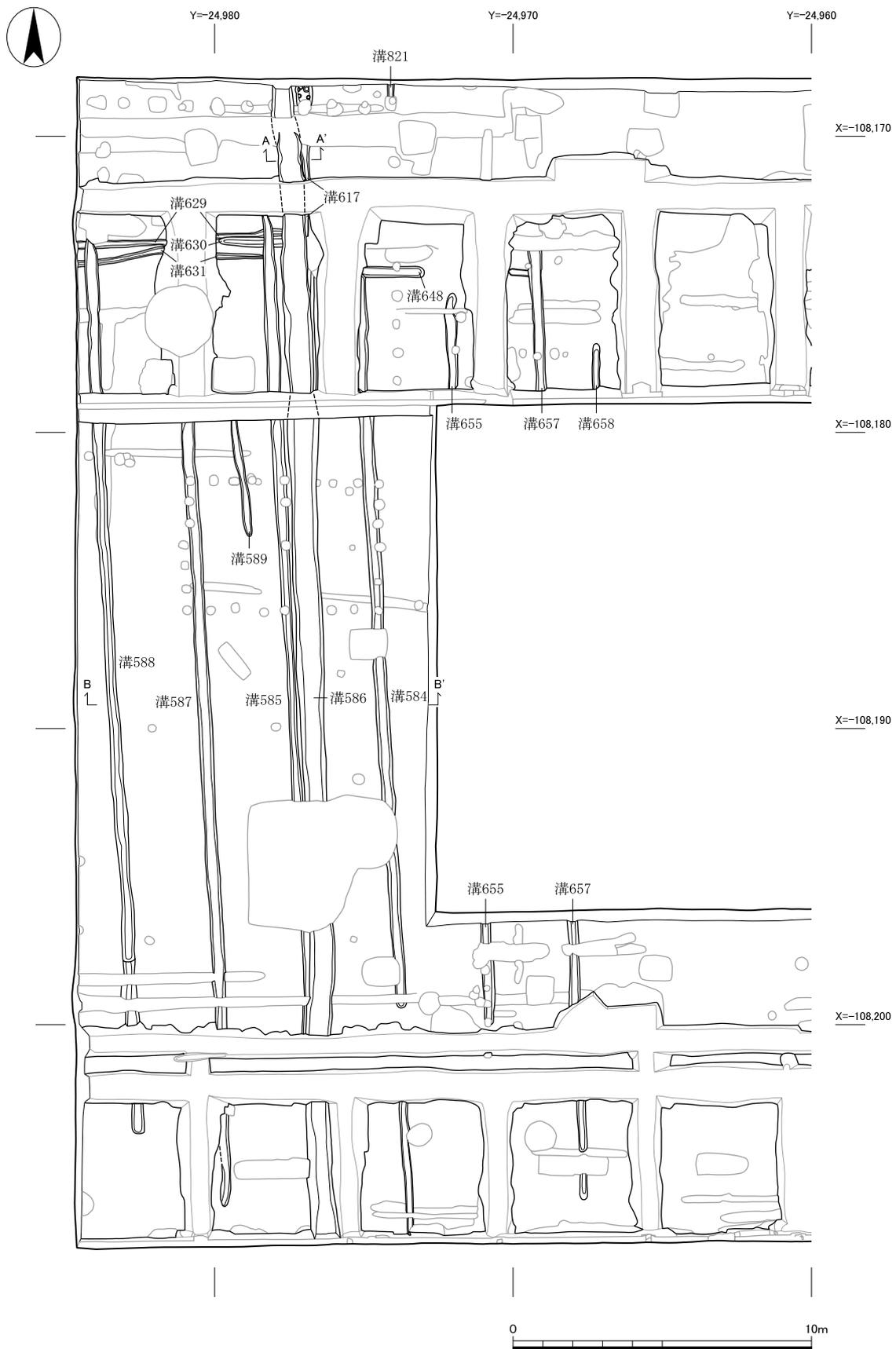


图17 第1-2面平面图 (1:200)

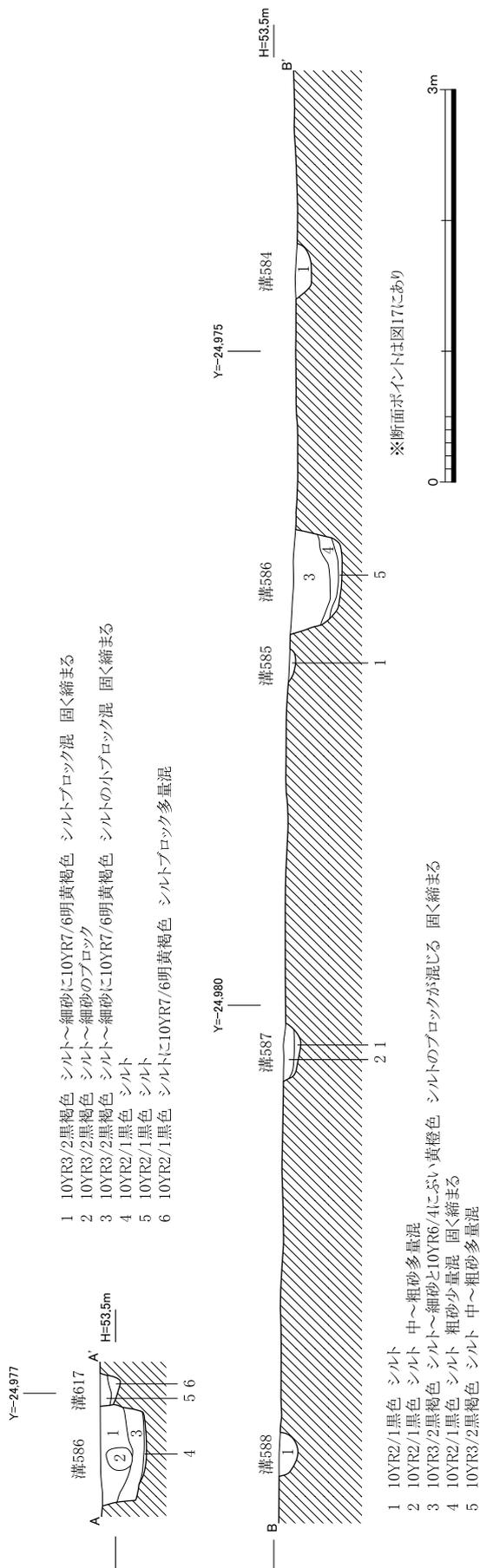


図18 溝584～588・617断面図（1：50）

色シルト～細砂層で埋まり非常に固く締まる。出土遺物は極めて少ないが、13世紀初頭頃の山茶碗が出土したこと、掘立柱建物1の柱穴に削平されることから室町時代前期以前の溝と考えられる。

溝584・585・587～589・617・655・657・658・821（図18）主軸方位が北に対して約3度西に振れる南北方向の溝群である。約2.5m間隔で平行に並ぶ。検出長は0.5～32.0m、幅0.15～0.45m、深さは0.05～0.2mある。断面形は半円形を呈する。底面の標高は北が高く、南が低い。埋土は黒色シルトが主体となる。時期を判別できる出土遺物はないが、溝585・617が溝586に削平されるため、鎌倉時代以前の耕作に伴う溝群と考えられる。

溝629～631・648 調査区北西部で検出した東西方向の溝群である。検出長は2.0～7.0m、深さは0.05～0.15mある。断面形は半円形状のものと同中央が深くなる薬研堀状のものがある。埋土は黒色シルトが主体となる。時期を判別できる出土遺物はないが、上記した南北溝群に削平されるため、溝群の中では最も古いものと捉えられる。

（3）第2面（平安時代）の遺構（図19、図版4-1）

第2面では、掘立柱建物2棟と土坑2基などを検出した。その他、建物としてのまともは捉えられなかったが、調査区全域で小規模な柱穴を多数検出した。出土遺物や形状から一部は平安時代以前に遡るものの可能性がある。

掘立柱建物3（図20、図版4-2） 調査区東半で検出した。梁行2間、桁行4間の南北棟建物である。方位は北に対して約2度東に振れる。柱間は2.2～2.6mで不等間である。北面梁行中央は

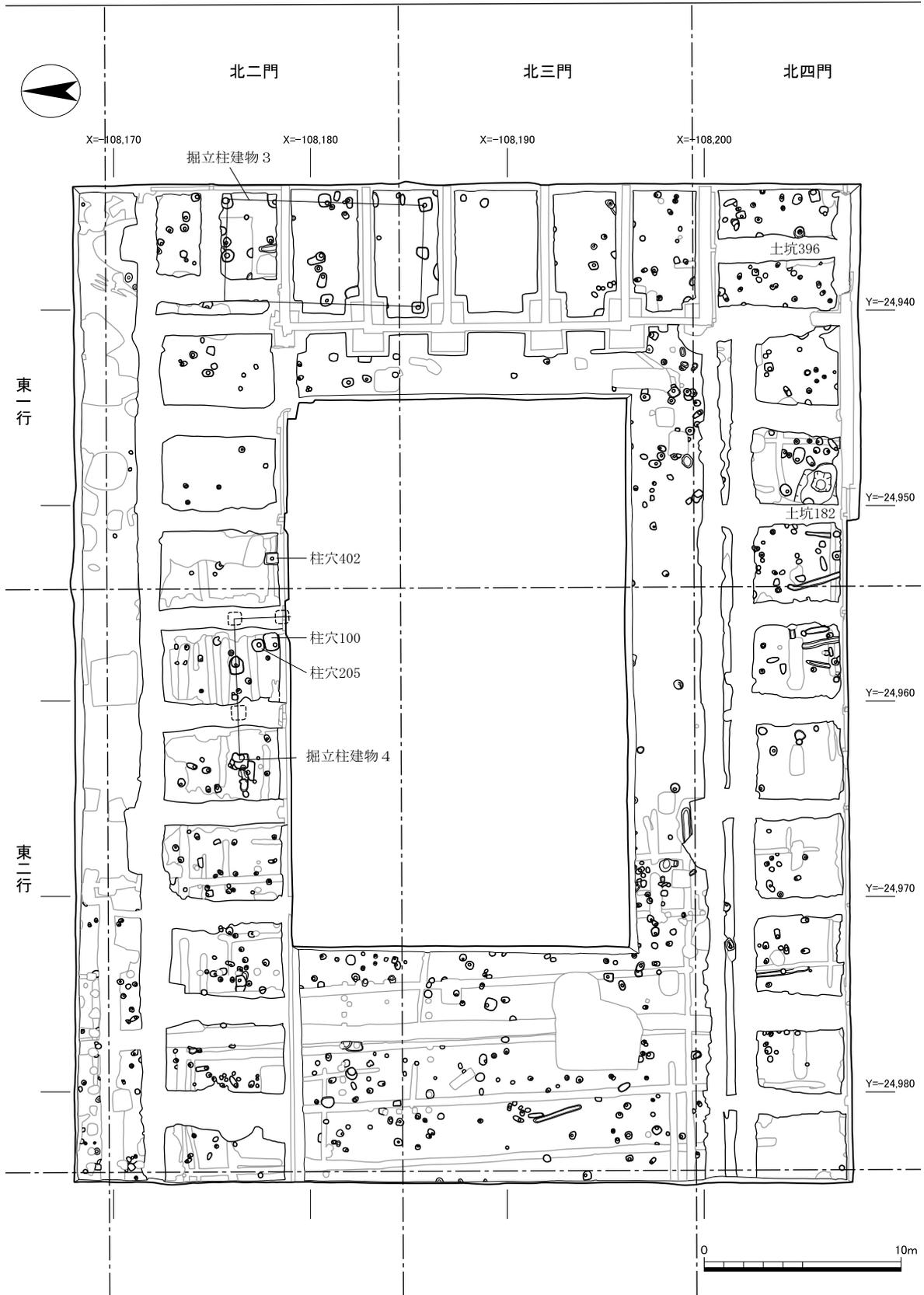
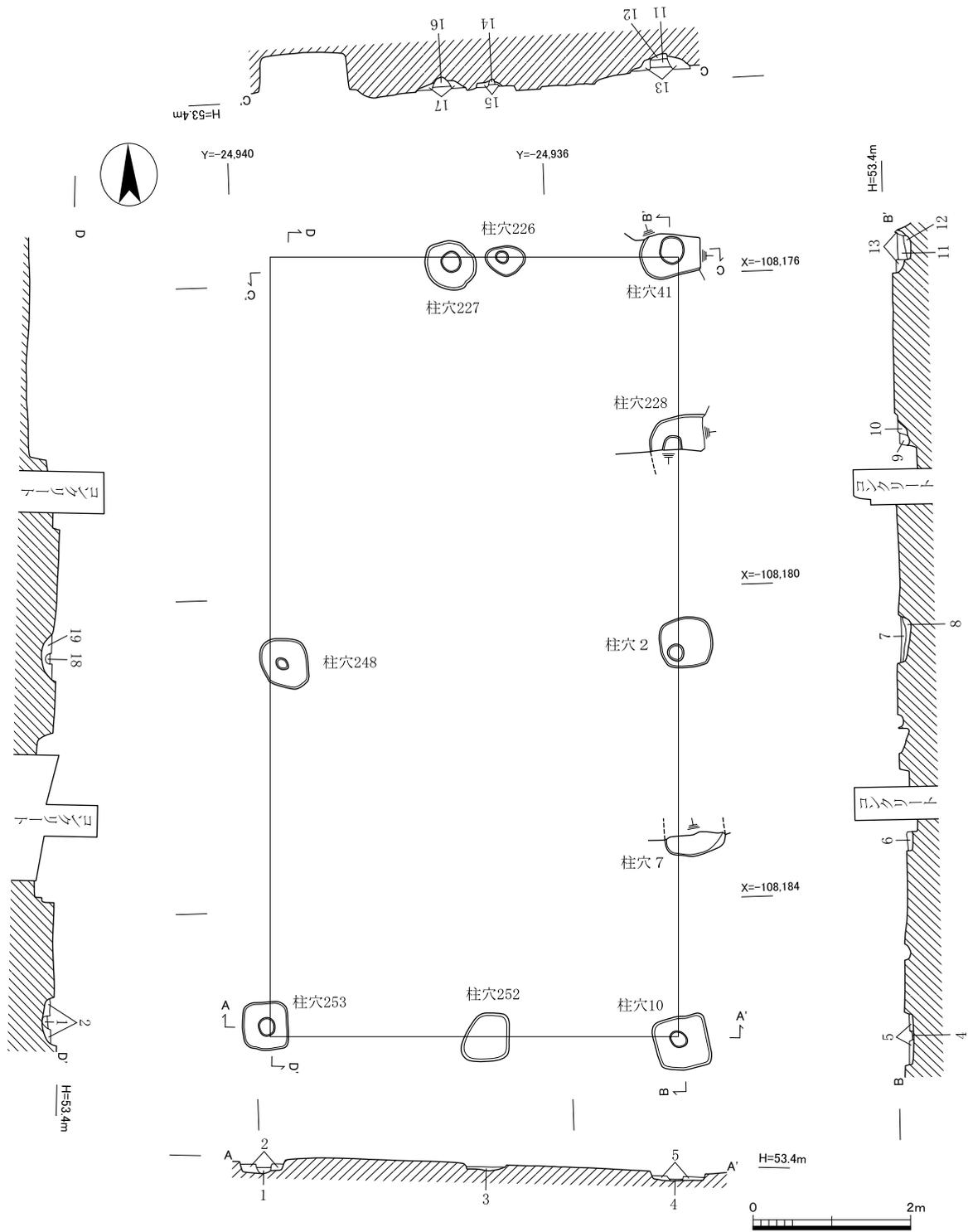
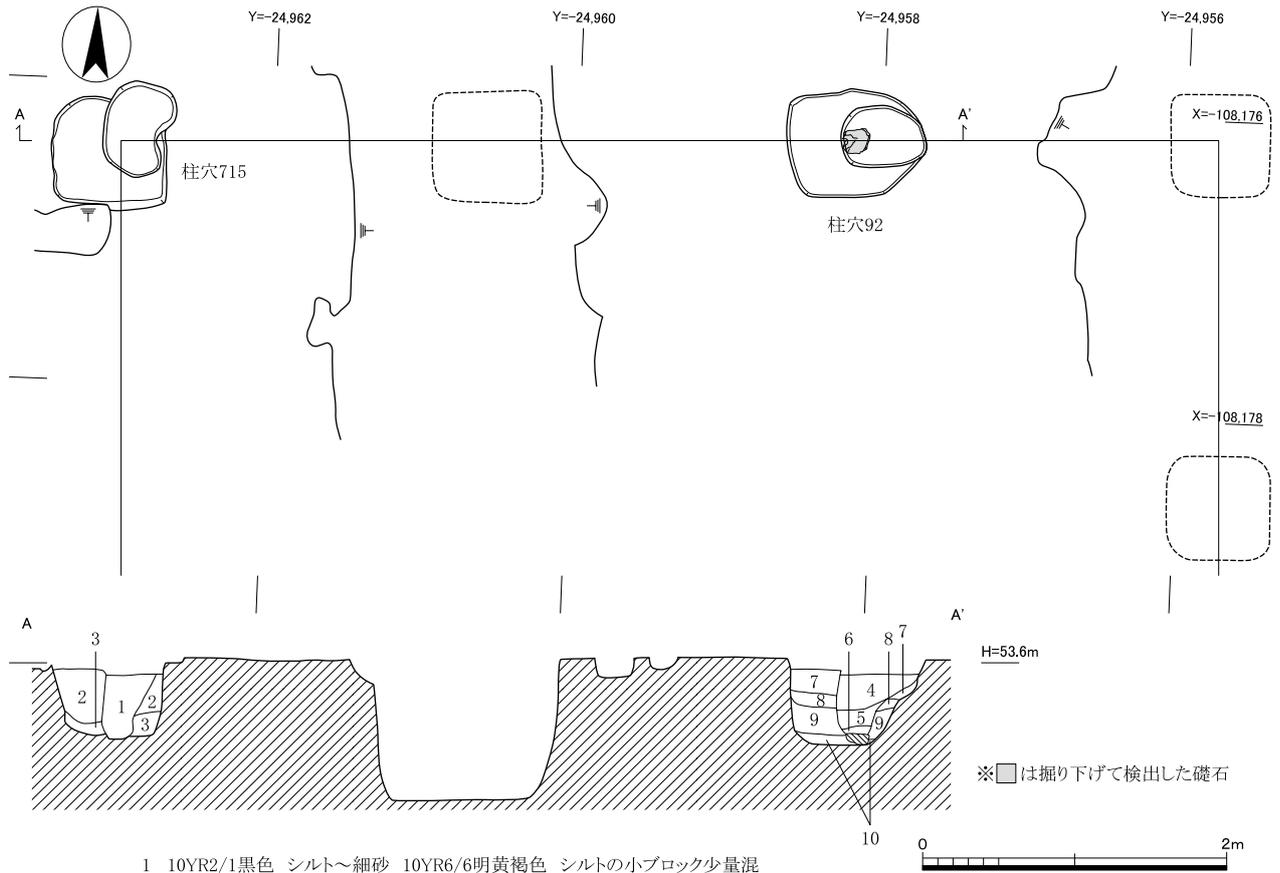


图19 第2面平面图 (1 : 300)



- | | | | |
|----|------------|--------|---------------------|
| 1 | 10YR3/2黒褐色 | シルト～細砂 | 粗～極粗砂少量混 |
| 2 | 10YR3/2黒褐色 | シルト～細砂 | 粗～極粗砂・小礫多量混 |
| 3 | 10YR2/1黒色 | シルト～細砂 | φ1～5cmの礫少量混 |
| 4 | 10YR2/1黒色 | シルト | 粘質 |
| 5 | 10YR3/2黒褐色 | シルト～細砂 | |
| 6 | 10YR2/1黒色 | シルト～細砂 | 粗～極粗砂多量混 |
| 7 | 10YR2/1黒色 | シルト～細砂 | 粗～極粗砂混 |
| 8 | 10YR2/1黒色 | シルト～細砂 | |
| 9 | 10YR2/1黒色 | シルト～細砂 | |
| 10 | 10YR2/1黒色 | シルト～細砂 | 10YR3/2黒褐色 シルトブロック混 |
| 11 | 10YR2/1黒色 | シルト～細砂 | 粗～極粗砂混 |
| 12 | 10YR2/1黒色 | シルト～細砂 | |
| 13 | 10YR2/1黒色 | シルト～細砂 | 粗～極粗砂多量混 |
| 14 | 10YR2/1黒色 | シルト～細砂 | |
| 15 | 10YR2/1黒色 | シルト～細砂 | 小礫多量混 |
| 16 | 10YR3/2黒褐色 | シルト～細砂 | 粗～極粗砂多量混 |
| 17 | 10YR2/1黒色 | シルト～細砂 | 小礫多量混 |
| 18 | 10YR2/1黒色 | シルト～細砂 | 粗～極粗砂少量混 |
| 19 | 10YR2/1黒色 | シルト～細砂 | 粗～極粗砂混・小礫多量混 |

図20 掘立柱建物3実測図 (1 : 80)



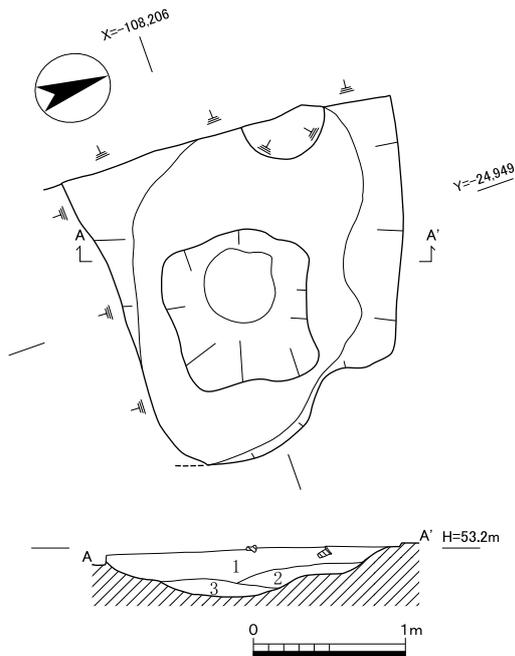
- 1 10YR2/1黒色 シルト～細砂 10YR6/6明黄褐色 シルトの小ブロック少量混
- 2 10YR2/1黒色 シルト～細砂 10YR6/6明黄褐色 シルトの大ブロック多量混
- 3 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 粗～極粗砂多量混
- 4 10YR2/1黒色 シルト～細砂 10YR6/6明黄褐色 シルトの小ブロック少量混
- 5 10YR2/1黒色 シルト～細砂 10YR6/6明黄褐色 シルトの小ブロック多量混
- 6 10YR2/1黒色 シルト～細砂
- 7 10YR2/1黒色 シルト～細砂 10YR6/6明黄褐色 シルトの大ブロック多量混
- 8 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂
- 9 10YR2/1黒色 シルト～細砂 10YR6/6明黄褐色 シルトの大ブロック多量混
- 10 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 粗～極粗砂多量混

図21 掘立柱建物4 実測図 (1 : 50)

柱穴226・227が並列するが、柱間からみれば柱穴226がこの建物に伴う柱穴である可能性が高い。柱掘形の平面形は隅丸方形か歪な方形を呈し、一辺の長さ0.4～0.8m、深さは0.05～0.2mある。柱痕跡から推測される柱径は0.1～0.25mある。柱穴41の掘形から平安時代前期初頭の土師器と須恵器片が出土した。

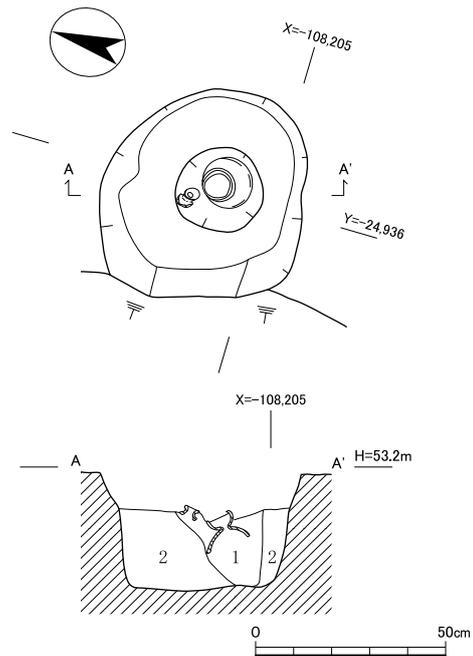
掘立柱建物4 (図21、図版5-1～3) 調査区北半中央で検出した。調査区内で検出した柱穴は柱穴92・715の2基のみであるが、攪乱との位置関係から東西3間、南北1間以上の建物と考えた。方位は北に対して約2度西に振れる。柱間は2.4m(8尺)等間と推測される。柱掘形の平面形は隅丸方形で、一辺の長さは0.65～0.8m、深さは柱穴92が約0.6m、柱穴715が約0.5mある。柱穴92は東方向、柱穴715は北方向に柱の抜き取りを行っている。柱穴92は地下式礎石をもつ。柱穴715は柱当りが検出され、それから推測される柱径は約0.15mある。時期を判別できる遺物は出土しなかった。

柱穴100・205・402 調査区北半で検出した柱穴群である。いずれも平面方形で深い掘形を持ち、平安時代前期と考えられる遺物が出土したが、建物として復元できなかった。



- 1 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 φ1～10cmの礫混
- 2 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 φ1～3cmの礫多量混
- 3 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 φ1～3cmの礫少量混

図22 土坑182実測図 (1:50)



- 1 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂 やや粘質
- 2 10YR2/1黒色 シルト～細砂に10YR6/6明黄褐色
シルトブロック、炭化物少量混

図23 土坑396実測図 (1:20)

柱穴100は長辺約0.9m、短辺約0.75mの隅丸長方形で、深さは約0.55mある。柱痕跡から推測される柱径は約0.2mある。

柱穴205は一辺約0.6mの隅丸方形で、深さは約0.55mある。柱痕跡から推測される柱径は約0.25mある。

柱穴402は長辺約0.7m、短辺約0.6mの長方形で、深さは約0.4mある。柱痕跡から推測される柱径は約0.15mある。

土坑182 (図22) 調査区南半東で検出した。平面不整形な土坑で、東西約2.0m、南北約2.1mある。中央部が深く、最深部の深さは検出面から約0.4mある。埋土から平安時代中期の遺物がややまとまって出土した。

土坑396 (図23、巻頭図版2) 調査区南東隅で検出した。越州窯青磁の唾壺を埋納した土坑である。西側は攪乱を受ける。平面形は不整形で、東西径約0.55m、南北径約0.5m、深さ約0.3mある。ほぼ中央に唾壺が口縁部を下に向けて埋められる。唾壺は底部を欠く。唾壺の横からは須恵器壺の口縁部が出土した。断面観察から、掘立柱の柱抜き取り穴 (図23-1層) に埋納したものである可能性が高いが、他に建物を構成する柱穴が検出できなかったため土坑とした。

(4) 第3面 (飛鳥・奈良時代) の遺構 (図24、図版5-4)

第3面では掘立柱建物4棟、竪穴建物4棟、溝2条、その他の柱穴などを検出した。

掘立柱建物5 (図25、図版6-1) 調査区西半で検出した。桁行3間、梁行1間以上の南北棟建物と考えられる。方位は北に対して約10度西に振れる。柱間は柱穴757・736間が1.6mで、ほか

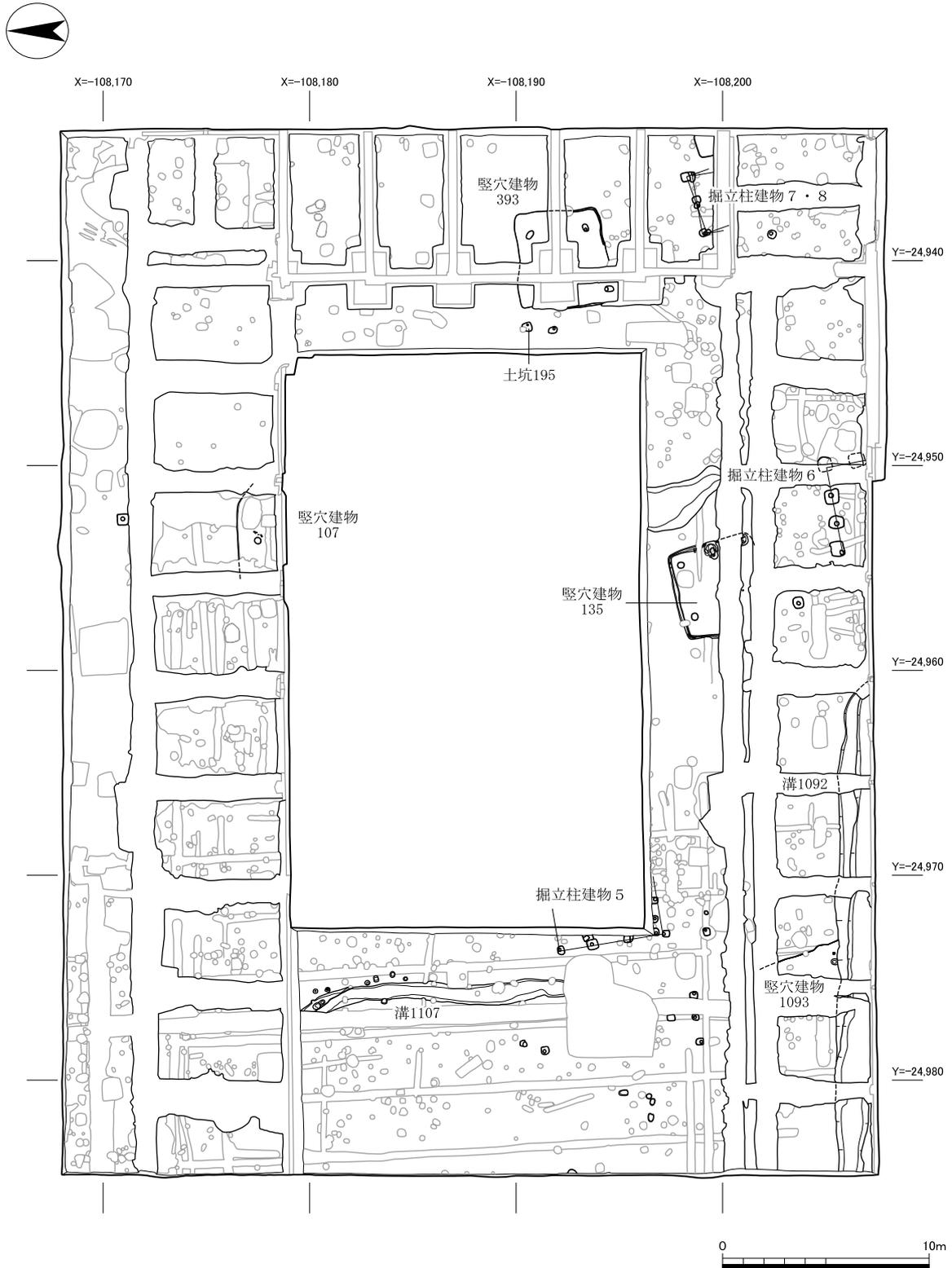
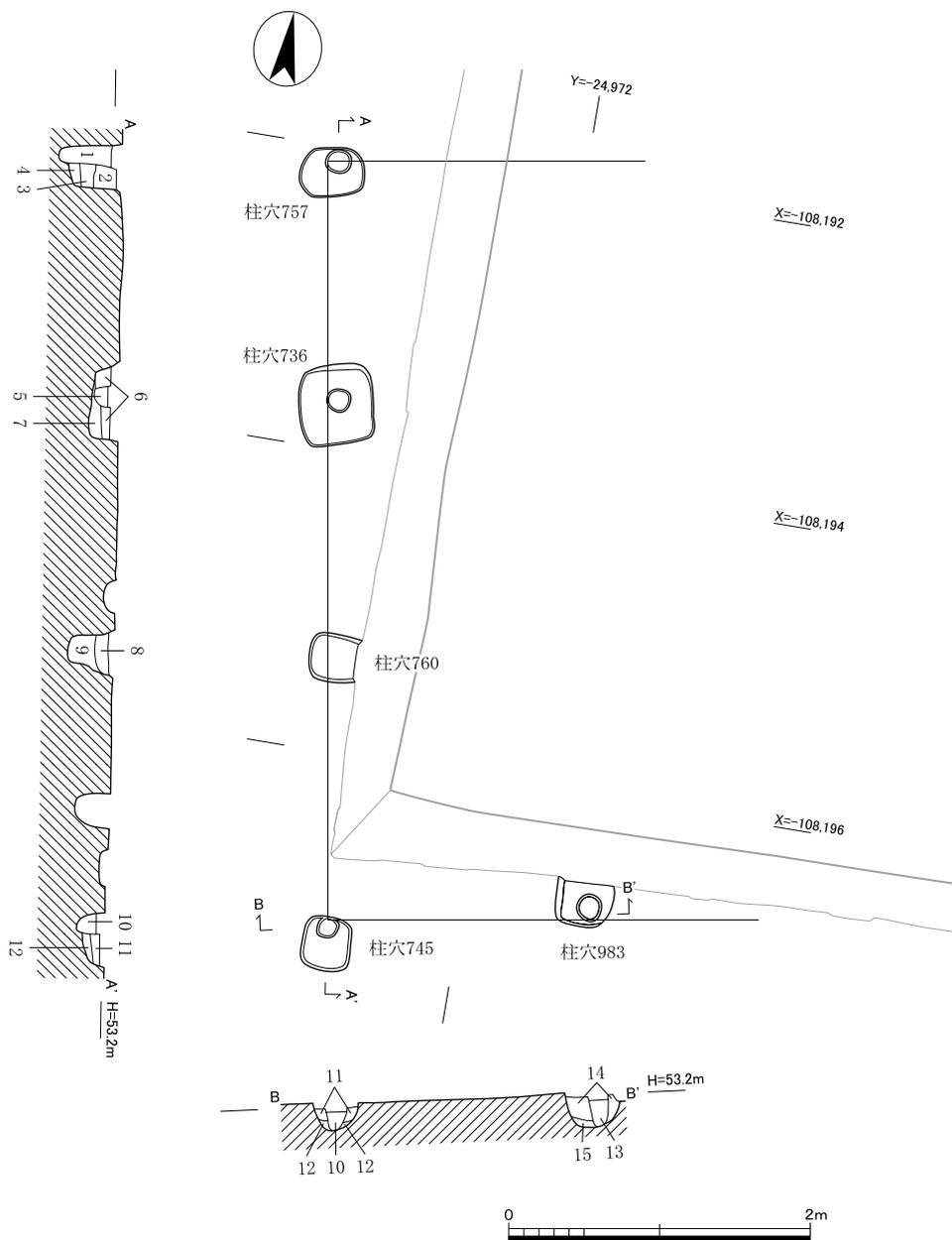


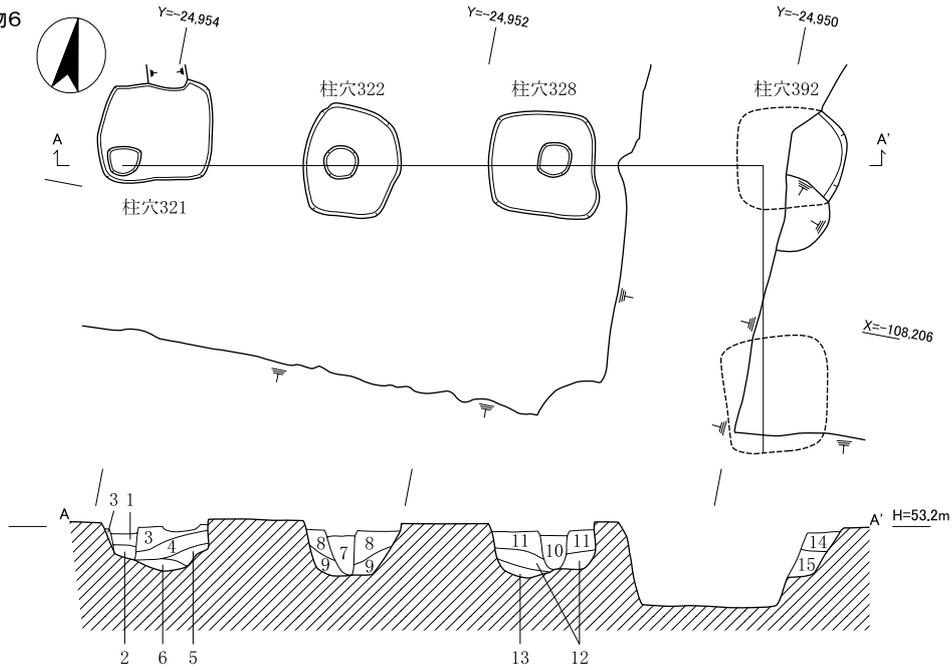
图24 第3面平面图 (1 : 300)



- 1 10YR3/1黒褐色 シルト
- 2 10YR6/6明黄褐色 シルト～細砂に10YR3/1黒褐色 シルトブロック多量混
- 3 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂
- 4 10YR3/2黒褐色 細～中砂
- 5 10YR6/6明黄褐色 シルトと10YR2/1黒色 シルトが混ざる
- 6 10YR3/1黒褐色 シルトに10YR6/6明黄褐色 シルト少量混
- 7 10YR6/6明黄褐色 シルトに10YR3/1黒褐色 シルト少量混
- 8 10YR3/1黒褐色 シルト
- 9 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂
- 10 10YR2/1黒色 シルト～細砂
- 11 10YR3/1黒褐色 シルトと10YR6/6明黄褐色 シルトが混ざる
- 12 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂
- 13 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂
- 14 10YR3/1黒褐色 シルトと10YR6/6明黄褐色 シルトが混ざる
- 15 10YR5/6黄褐色 細砂

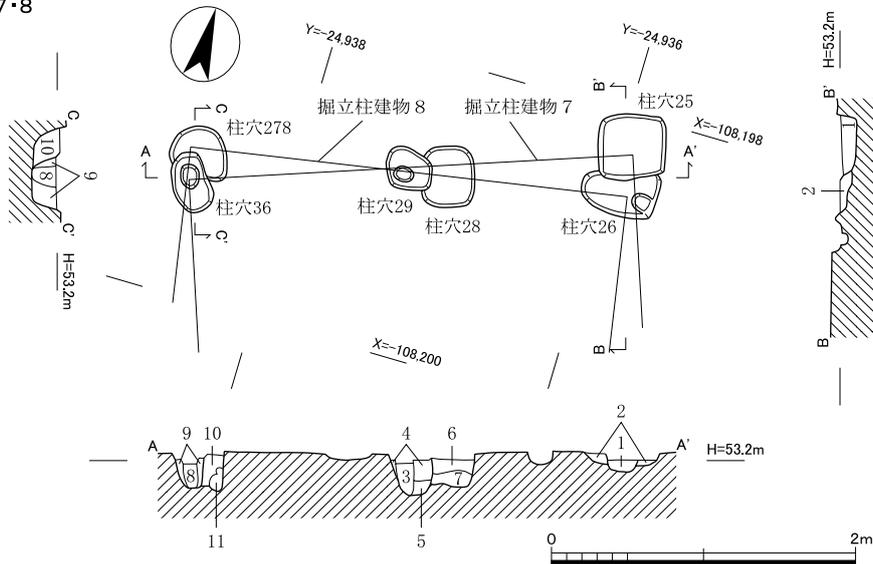
図25 掘立柱建物5実測図 (1 : 50)

掘立柱建物6



- | | |
|-------------------------------|-------------------------------------------------|
| 1 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 | 9 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂に10YR6/6明黄褐色 シルトの小ブロック多量混 |
| 2 10YR2/1黒色 シルト～細砂 | 10 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂に10YR5/4にぶい黄褐色 シルトの小ブロック混 |
| 3 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 粗砂混 | 11 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂に10YR5/4にぶい黄褐色 シルトの小ブロック多量混 |
| 4 3層に10YR6/6明黄褐色 シルトの小ブロック多量混 | 12 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂に10YR5/4にぶい黄褐色 シルトの大ブロック少量混 |
| 5 10YR2/1黒色 細砂 | 13 10YR2/1黒色 シルト |
| 6 3層に10YR6/6明黄褐色 シルトの大ブロック混 | 14 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 小礫少量混 |
| 7 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 | 15 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 |
| 8 7層に10YR6/6明黄褐色 シルトブロック少量混 | |

掘立柱建物7・8



- | | |
|---------------------|--------------------------|
| 1 10YR2/1黒色 シルト～細砂 | 10YR6/6明黄褐色 シルトブロック混 |
| 2 10YR2/1黒色 シルト～細砂 | 10YR6/6明黄褐色 シルトブロック多量混 |
| 3 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂 | |
| 4 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 | 10YR5/4にぶい黄褐色 シルトブロック少量混 |
| 5 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂 | |
| 6 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト | 10YR2/1黒色 シルト～細砂ブロック少量混 |
| 7 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 | 10YR5/4にぶい黄褐色 シルトブロック少量混 |
| 8 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂 | |
| 9 10YR2/1黒色 シルト～細砂 | 10YR6/6明黄褐色 シルトブロック混 |
| 10 10YR2/1黒色 シルト～細砂 | 10YR6/6明黄褐色 シルトブロック多量混 |
| 11 10YR2/2黒褐色 細砂 | |

図26 掘立柱建物6～8実測図(1:50)

は1.7 mである。柱掘形の平面形は隅丸方形で、一辺の長さ0.3～0.5 m、深さは0.1～0.4 mある。柱痕跡から推測される柱径は0.1～0.15 mある。

掘立柱建物 6 (図26、図版6-2) 調査区南半で検出した。調査区内では東西3間分の柱穴を検出した。北側には対応する柱穴が検出されなかったため、調査区外の南側に展開する建物と考えられる。方位は北に対して約10度西に振れる。柱間は1.4 mの等間である。柱掘形の平面形は隅丸方形で、一辺0.5～0.7 m、深さは0.3～0.35 mある。柱痕跡から推測される柱径は、約0.2 mある。

掘立柱建物 7・8 (図26) 調査区南東部で検出した。重複する東西2間分の柱穴を検出した。先行する建物を掘立柱建物8、それを削平する建物を掘立柱建物7としたが、同一建物の建て替えに伴う可能性が高い。東側では対応する柱穴が検出されなかったため、東西2間の南北棟建物と推定したが、周囲の攪乱が激しく、建物の規模は不明である。

掘立柱建物7は、方位が北に対して約10度西に振れる。柱間は約1.4 mの等間である。柱掘形の平面形は歪な隅丸方形で、一辺0.2～0.45 m、深さは0.1～0.25 mある。柱痕跡から推測される柱径は約0.1 mある。

掘立柱建物8は、方位が北に対して約20度西に振れる。柱間は約1.4 mの等間である。柱掘形の平面形は歪な隅丸方形で、一辺0.3～0.35 m、深さは0.05～0.25 mある。柱穴26のみ柱痕跡が検出

でき、柱径は約0.1 mと推測される。

竪穴建物 107 (図27、図版7-2・3) 調査区北半で検出した。調査区内では北辺の一部の検出にとどまり、全容は不明である。北辺は北に対して約2度西に振れる。検出面から床面までの深さは約0.1 mある。西側床面上には炭化物と焼土が薄く堆積する(4層)。また、床面上でピット404を検出した。掘形は円形で径約0.3 m、深さ約0.15 mある。主柱穴の1基になる可能性がある。ピット404の東側では床面直上で土器器甕が出土した。全面に貼床を行っており(5層)、貼床の厚さは約0.02～0.08 mある。貼床中からは土器器甕や製塩土器が出土した。

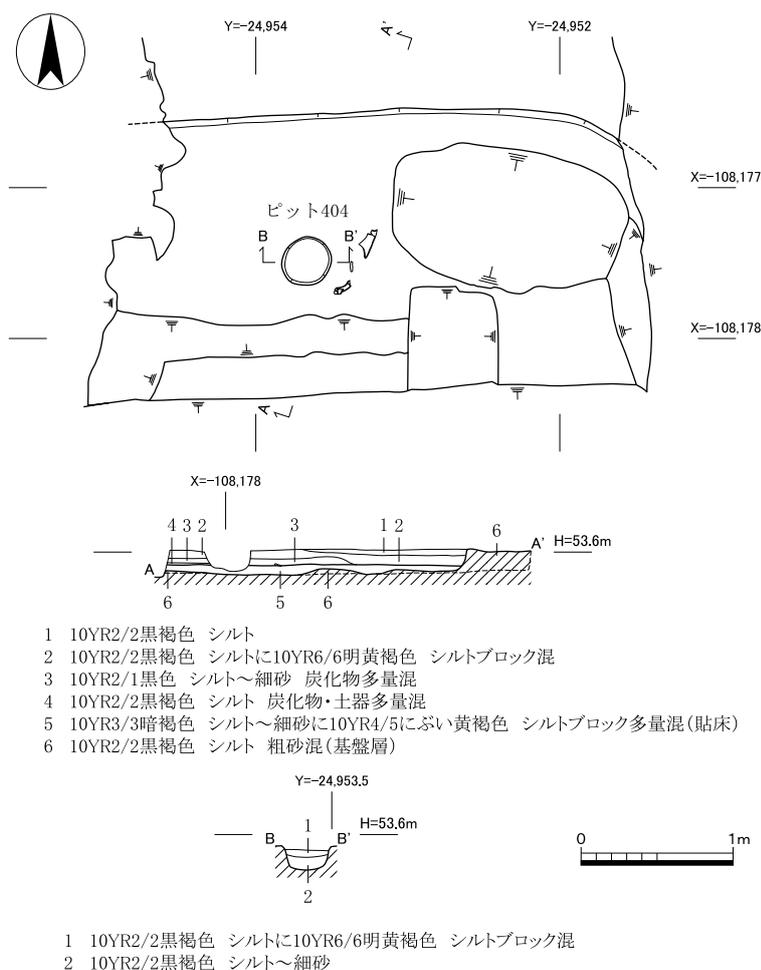
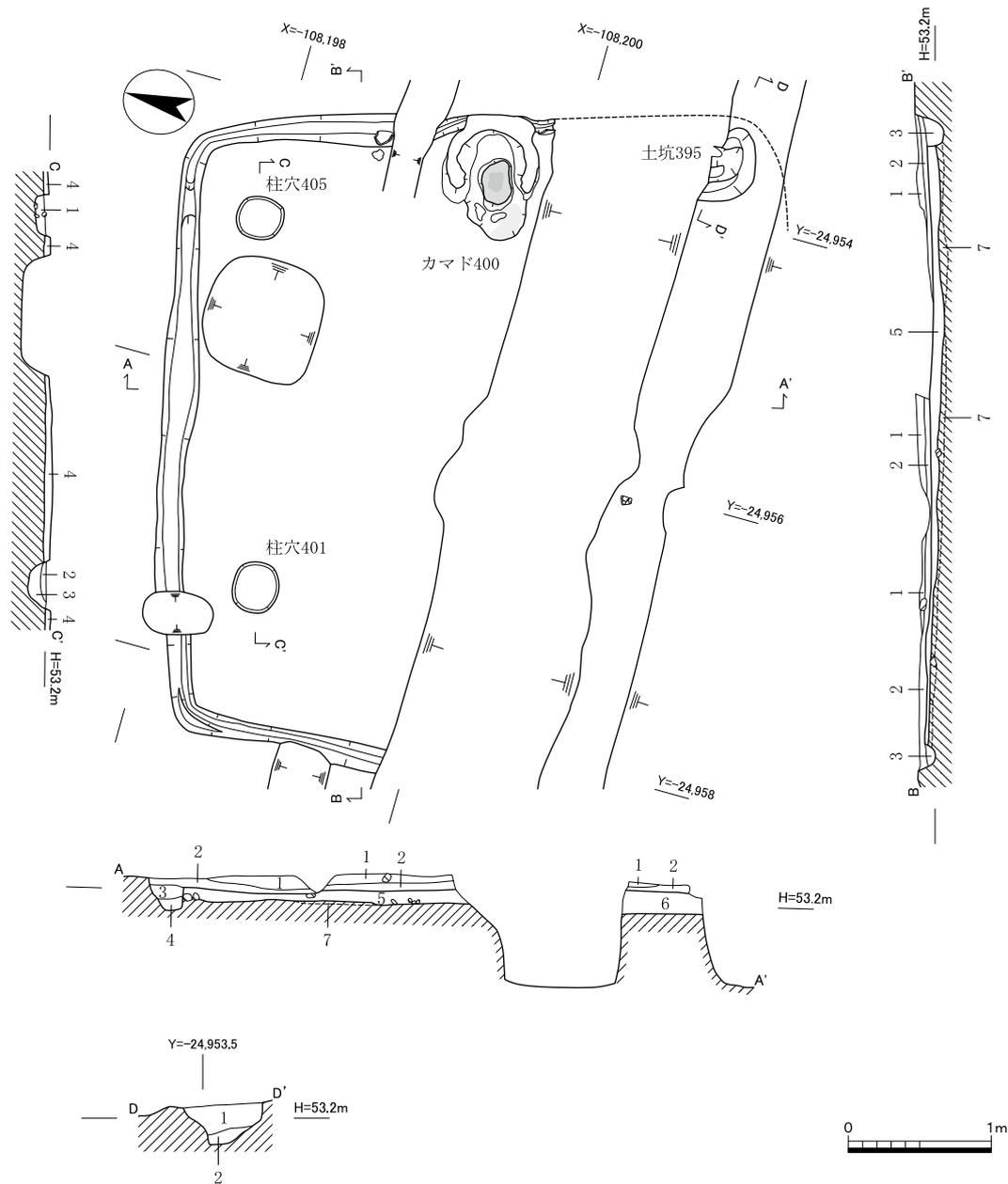


図27 竪穴建物107実測図(1:50)



A・Bライン

- 1 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 φ3～7cmの礫少量、炭化物少量混
- 2 10YR3/1黒褐色 シルト～細砂 10YR6/6明黄褐色 シルトブロック混
- 3 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂 10YR6/6明黄褐色 シルトブロック混(壁溝)
- 4 10YR2/3黒褐色 シルト～細砂(壁溝)
- 5 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 固く締まる(貼床)
- 6 10YR3/3暗褐色 シルトに10YR5/4にぶい黄褐色 シルトブロック多量混 炭化物・焼土少量混(貼床)
- 7 10YR2/1黒色 シルト～細砂 φ1～10cmの礫多量混(基盤層)

Cライン

- 1 10YR2/1黒色 シルト～細砂 φ1～3cmの礫混
- 2 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂に10YR4/3にぶい黄褐色 シルトブロック混
- 3 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂 やや粘質
- 4 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 固く締まる(貼床)

Dライン

- 1 10YR2/1黒色 シルトに10YR4/4褐色 シルト～細砂ブロック混
- 2 10YR2/1黒色 シルト～細砂に10YR4/4褐色 シルト～細砂ブロック微量混

図28 竪穴建物135実測図(1:50)

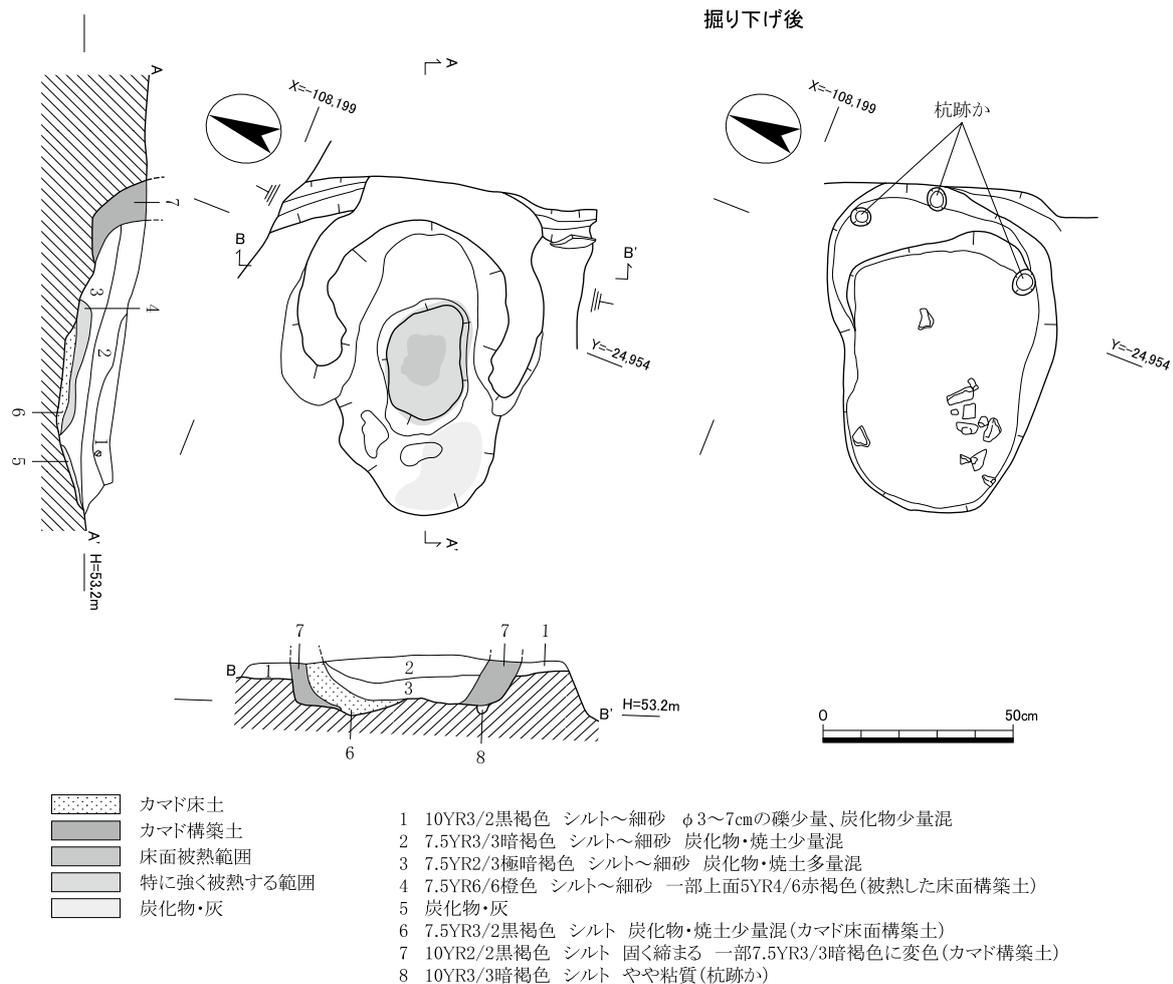


図29 カマド400実測図(1:20)

竪穴建物135(図28・29、図版8-1～3)調査区南半で検出した。南半は攪乱を受けるが、一辺約4.2mの隅丸方形の竪穴建物に復元できる。方位は北に対して約15度西に振れる。検出面から床面までの深さは0.05～0.15mある。壁溝はカマド部分を除いてほぼ全周する。壁溝の幅は0.1～0.2m、床面からの深さは0.05～0.2mある。床面上では支柱穴と考えられる柱穴401・405を検出した。掘形は円形で径約0.3m、深さは柱穴401が約0.15m、柱穴405が約0.1mある。建物南東隅では貯蔵穴と考えられる土坑395を検出した。北半を攪乱で削平されるが、平面円形と考えられ、径約0.55m、深さは約0.3mある。土坑内からは土師器と須恵器の小片と平瓦が出土した。建物埋土からは土師器、須恵器が出土し、壁溝からは丸瓦が出土した。

東側壁際ではカマド400を検出した。造り付けカマドの基底部で、平面形は馬蹄形を呈する。基底部最大幅は約0.65m、最大長約0.6m、残存高は床面から最大で約0.05mある。カマドの床表面は被熱により赤変し固く締まる。手前には掻き出した炭化物と灰が薄く堆積する(図29-5層)。全体を掘り込んでからカマドを構築している。掘り込みの範囲は東西約0.8m、南北約0.6m、深さは床面からで0.05～0.1mある。掘り込み面で3基の杭跡を検出した。杭を打ち込み、カマド構築の芯材とした可能性が考えられる。

建物全面に貼床を行っている。貼床の厚さは0.05～0.15 mある。貼床中からは土師器甕などが出土した。

竪穴建物393（図30、図版7-1） 調査区東半で検出した。平面形は一辺4.0～4.5 mのやや歪な隅丸方形である。方位は東西辺を基準とすると北に対して約3度西に振れる。検出面から床面までの深さは約0.05 mある。建物南半には壁溝が周る。壁溝の幅は0.05～0.1 m、深さは0.05 m以下である。床面上で支柱穴と考えられる柱穴394・397・398を検出した。掘形は楕円形でいずれも長径約0.4 m、深さは約0.1 mある。柱痕跡から推測される柱径は0.1～0.15 mある。

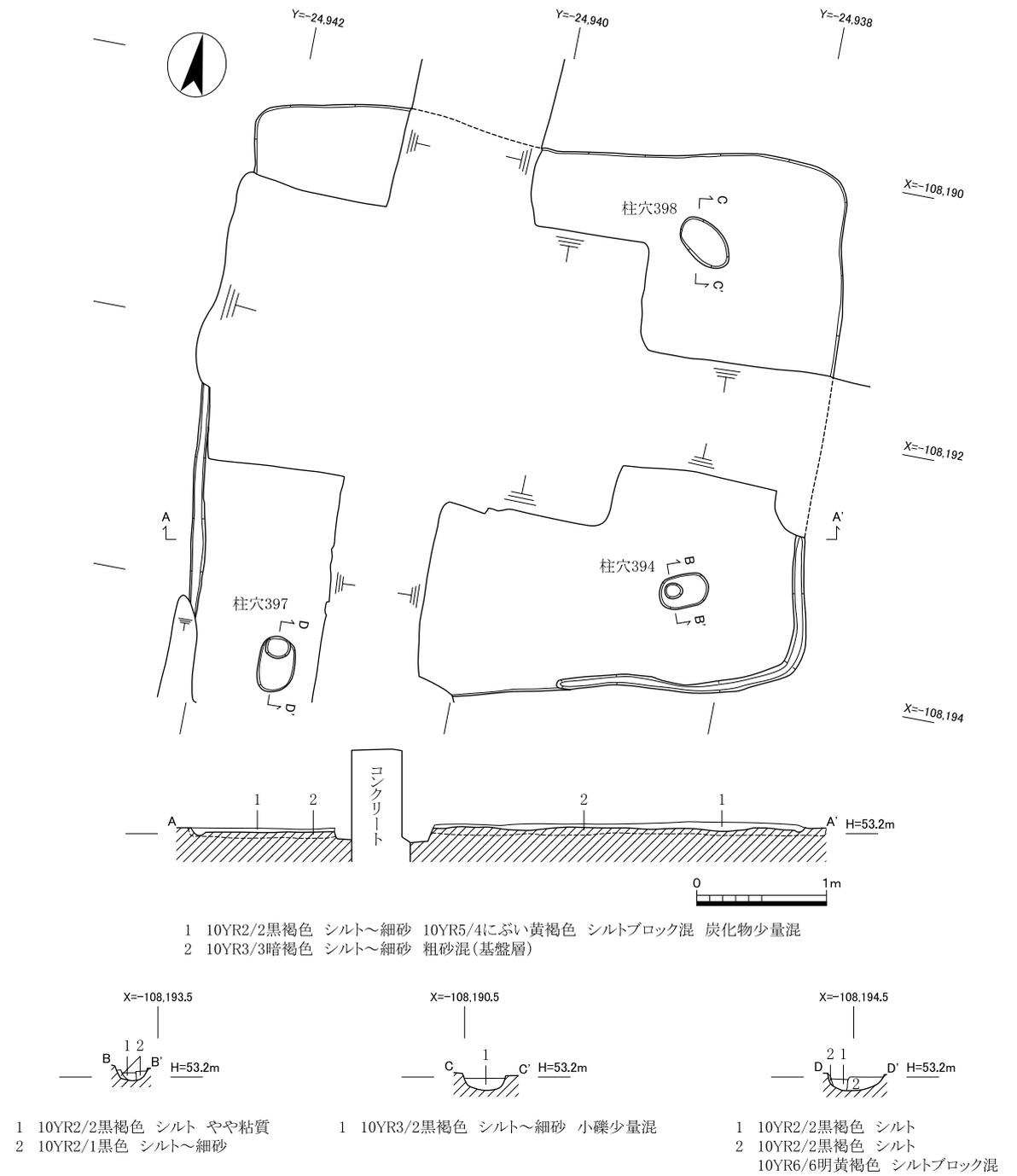


図30 竪穴建物393実測図（1：50）

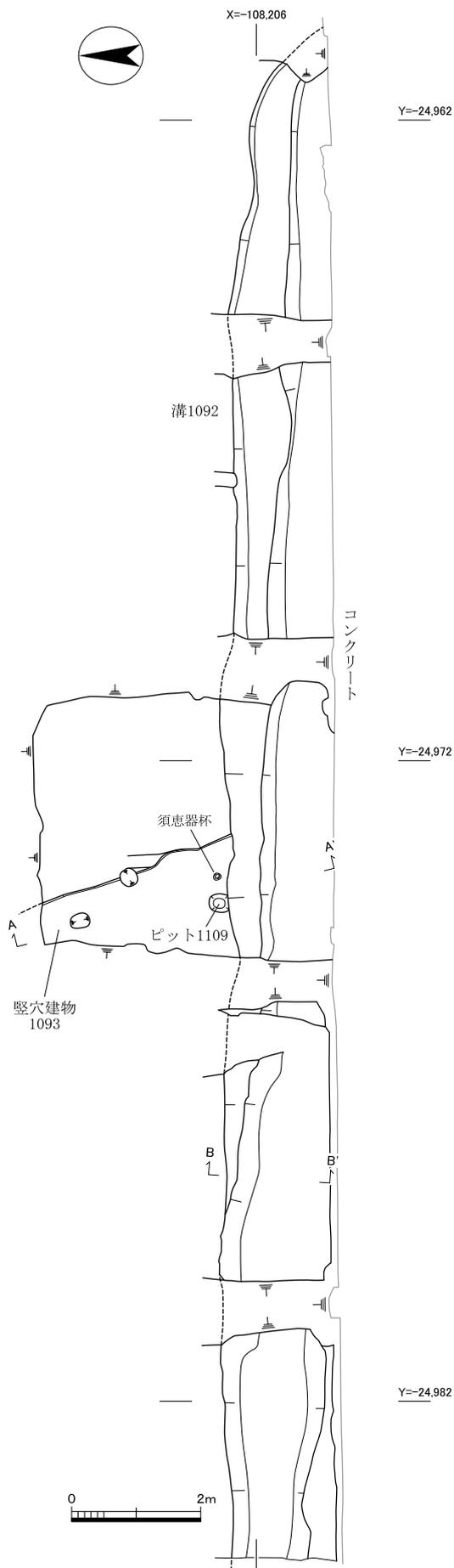


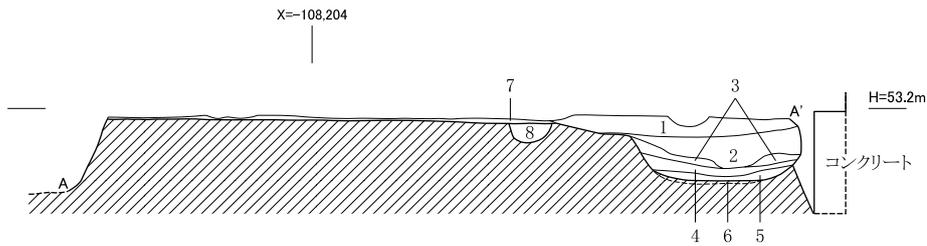
図31 溝1092・竪穴建物1093平面図 (1 : 100)

竪穴建物1093 (図31・32、図版6-4) 調査区南西部で検出した。溝1092に削平を受け、東辺の一部のみが残る。方位は北に対して約20度西に振れる。検出面から床面までの深さは0.05m以下である。床面上でピット1109を検出した。平面円形で径約0.3m、深さは約0.1mある。支柱穴の1基の可能性がある。ピット1109の東では床面直上で完形の須恵器杯身が出土した。

溝1092 (図31・32、図版6-3) 調査区南端で検出した東西方向の溝である。検出長は約23mで、東西ともに調査区外に延びる。主軸方位は北に対して約3度東に振れる。南肩の大半が調査区外にあるため、全容は不明であるが、西端では溝幅は約1.6mある。検出面からの深さは0.3~0.5mある。断面は逆台形上を呈し、肩部が浅く広がる。底面の標高は西端で約52.8m、南端で52.65mで、西から東に低くなる。埋土は、最下層がやや粘質の暗褐色シルト~細砂層 (図32 Aライン5層、Bライン4層) で溝機能時の堆積と考えられる。それより上は明黒褐色シルト~細砂にブロック土が混じり、人為的に埋め戻した土と考えられる。埋土から須恵器・土師器の小片が出土した。土師器の中では製塩土器の比率が高い。

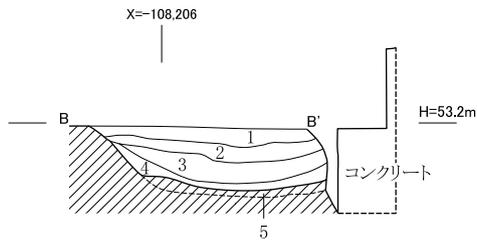
溝1107 (図24、図版8-4) 調査区西半で検出した南北方向の溝である。ゆるやかに蛇行する。検出長は約12.5mあり、攪乱を挟んだ南北では検出していない。幅0.6~1.0m、深さは0.1~0.2mある。断面形は擂鉢状を呈する。底面の標高は53.2~53.25mでわずかな凹凸があるが南北での高低差は少ない。埋土にはふい黄褐色シルト~細砂で均質である。遺物は出土しなかった。

土坑195 (図24) 調査区東半で検出した。平面形は不整円形で、長径約0.5m、深さは約0.05



Aライン

- 1 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂 極粗砂多量混
- 2 1層に10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂ブロック少量混
- 3 1層に10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂ブロック多量混
- 4 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂 10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂ブロック微量混
- 5 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂
- 6 10YR4/4褐色 細砂(基盤層)
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色 シルトに10YR2/2黒褐色 シルトブロック多量混(竪穴建物1093)
- 8 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂(ピット1109)



Bライン

- 1 10YR2/2黒褐色 シルト～細砂 極粗砂多量混
- 2 1層に10YR5/4にぶい黄褐色 シルト～細砂ブロック混
- 3 10YR3/2黒褐色 シルト～細砂 極粗砂中量混
- 4 10YR3/3暗褐色 シルト～細砂 やや粘質
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色 シルト(基盤層)



図32 溝1092・竪穴建物1093断面図(1:50)

mある。断面形は挿鉢状を呈する。埋土は黒色シルトに炭化物が混じる。埋土から土師器の製塩土器が出土した。

4. 遺 物

今回の調査では整理コンテナにして32箱の遺物が出土した。出土遺物には、土器・陶磁器類、瓦類、金属製品、木製品、石製品がある。全体の約9割を土器・陶磁器類が占め、それ以外は微量である。木製品は全て井戸501から出土した。遺物の帰属時期は飛鳥時代から室町時代までのものがある。奈良時代、平安時代前・中期、室町時代後期のものが多く、その他の時期の遺物は微量である。

以下では、主要な遺構から出土した遺物について種別に概要を述べる。なお、土器類の個別の詳細については表4にまとめた。

(1) 土器類

1) 鎌倉・室町時代の遺物 (図33)

溝586 溝埋土から土師器皿、須恵器杯・椀・壺、山茶碗、焼締陶器甕などが出土した。いずれも小片で、図化できたのは1の山茶椀の椀のみである。12世紀末から13世紀初頭頃の所産と考える。土師器皿には京都Ⅸ期古段階¹⁾と考えられるものが含まれることから、12世紀から15世紀前半頃までの遺物が混在していると考えられる。

掘立柱建物1 建物を構成する柱掘形から土師器皿・甕、瓦質土器鍋・火鉢、焼締陶器甕などが出土した。いずれも小片で図化できたのは2点のみである。柱穴511・513からは鉄釘が出土している。

2・3は白色系の土師器皿である。2はいわゆるへそ皿で口径6.2cmに復元できる。3は大型皿で口径15.4cmに復元できる。京都Ⅹ期古段階に属する資料と考える。

塀1 塀を構成する柱掘形から土師器皿、焼締陶器片、輸入陶磁器などが出土した。柱穴551からは鉄釘が出土している。

表3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ 箱数	Aランク点数	Bランク 箱数	Cランク 箱数
飛鳥時代 ～奈良時代	土師器、須恵器、瓦類		土師器6点、須恵器5点、軒丸瓦1点、丸瓦1点、平瓦5点：計18点	1箱	30箱
平安時代	土師器、須恵器、緑釉陶器、輸入陶磁器、瓦類、金属製品、石製品		土師器10点、須恵器3点、輸入陶磁器1点、石器1点：計15点		
鎌倉時代 ～室町時代	土師器、須恵器、山茶椀、瓦質土器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、金属製品、木製品		土師器8点、山茶椀1点、瓦質土器2点、焼締陶器1点、輸入陶磁器1点、木製品11点：計24点		
合 計		35箱	57点 (4箱)	1箱	30箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より3箱多くなっている。

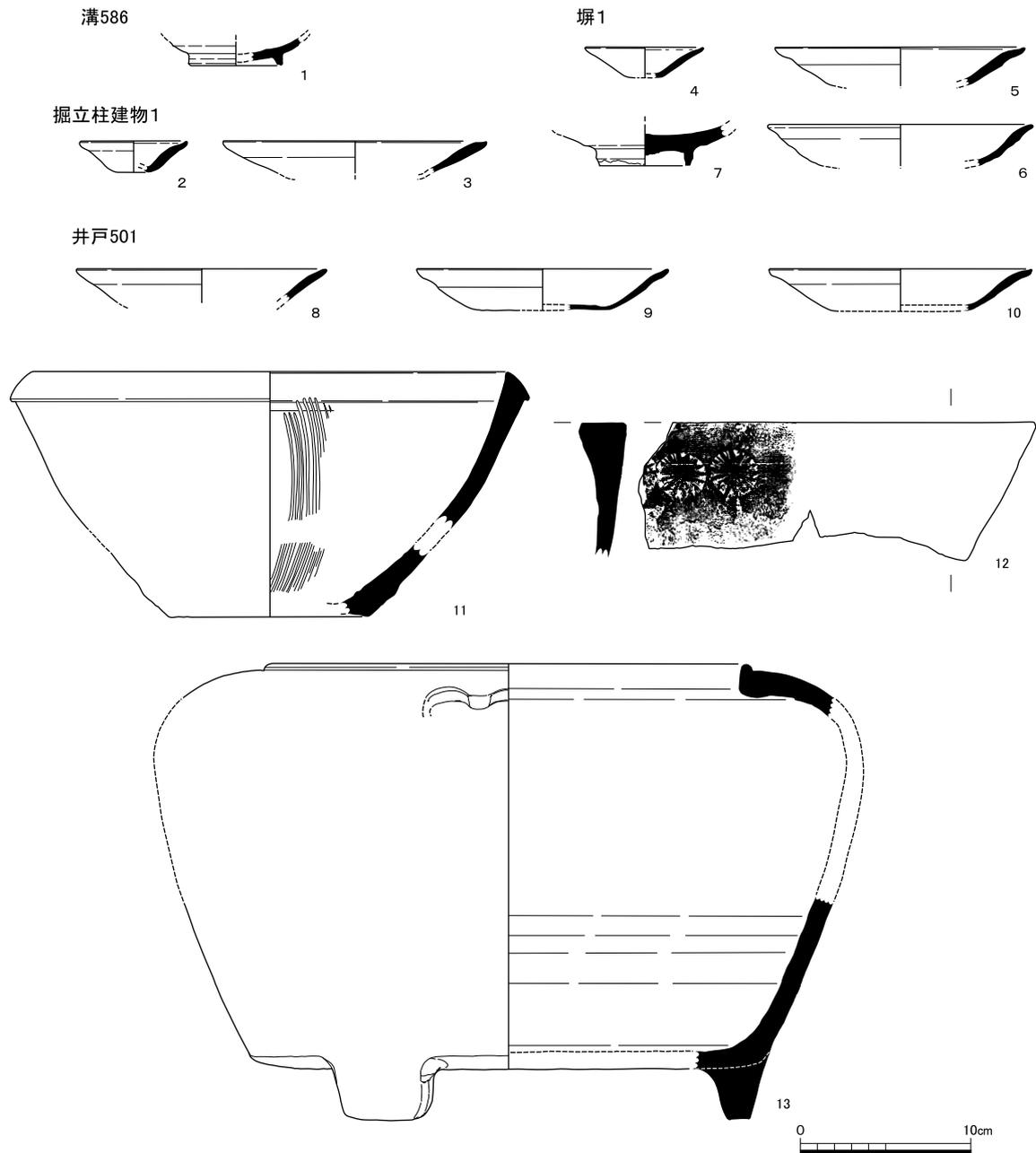


図33 中世土器実測図（1：4）

4～6は白色系の土師器皿である。4は小型皿で口径6.8cm、5・6は大型皿で口径14.6cmと15.6cmに復元できる。京都X期古段階に属する資料である。7は輸入陶磁器青磁椀である。龍泉窯産と考えられる。

井戸501 土師器皿、焼締陶器備前産播鉢・常滑産甕、瓦質土器火鉢・風炉、施釉陶器黄瀬戸盤などの土器類のほか、木製品が出土した。大半が木柙内からの出土である。

8～10は白色系の土師器皿である。いずれも大型皿で口径は14.6～15.3cmの間に分布する。京都X期古段階に属する資料と考える。11は焼締陶器の備前産播鉢である。9条1単位の播目をもつ。12は瓦質土器の火鉢である。外面に菊花文のスタンプが押される。二次焼成を受ける。13は瓦質土器の風炉である。方形板状の三足の脚が付く。強く張る肩部から頸部が突起状に短く立ち上が

る。肩部には雲形の火窓が開く。佐藤重聖氏の風炉形土器分類²⁾のⅥ類に該当する。15世紀後半から16世紀前半に見られる器形とされるものである。

2) 平安時代の遺物 (図34)

掘立柱建物3 建物を構成する柱穴41の柱痕跡から土師器皿、柱掘形から土師器皿と須恵器杯³⁾が出土したが、図化できたのは1点のみである。14は須恵器杯Aである。口径は12.4cmに復元できる。

土坑396 唾壺埋納遺構である土坑396からは、輸入陶磁器の唾壺以外に、土師器皿・甕・鍋、須恵器壺・甕が出土した。

15・16は土師器皿である。口径は17.0cmと18.8cmに復元できる。京都Ⅱ期中段階に属する資料と考えられる。17は須恵器の壺Lである。口縁部は完存するが全体的に摩滅が著しくおよぶ。18は輸入陶磁器の越州窯産唾壺である。底部以外は完存する。内外面ともに全面施釉される。

土坑182 土師器皿・高杯・甕・鍋、須恵器杯・蓋、瓦類、砥石などが出土した。

19～22は土師器皿である。口径は10.8～14.2cmの間に分布する。21は口縁端部に煤が付着し、灯明皿として使用されたものであろう。京都Ⅲ期古段階に属する資料と考えられる。23～25は土師器甕である。23・24は口縁端部を内側に強く折り返す。内面調整のハケメが残る。25の口縁端部は外方向に延び、水平な面を形成する。体部外面にはユビオサエ痕が明瞭に残る。内面はナデで仕上げる。26は土師器高杯である。脚柱部の面取りは7面である。27は須恵器の蓋と考えられる。外面は密なヘラミガキを施す。

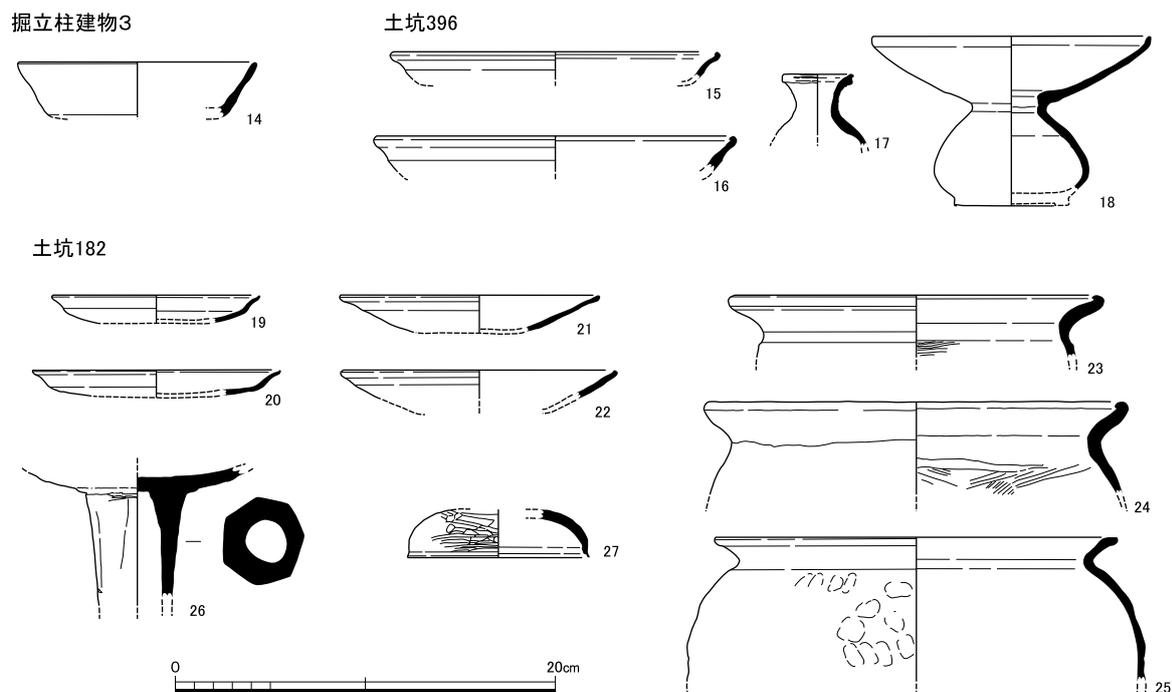


図34 平安時代土器実測図 (1:4)

3) 飛鳥・奈良時代の遺物 (図35)

溝1092 土師器椀・杯・製塩土器・甕、須恵器杯・甕、平瓦などが出土した。出土遺物は少ないが、その中で製塩土器の占める比率が高い。

28は土師器の椀Cである。外面にはヘラケズリの痕跡が残る。29は土師器の杯Aである。外面には横方向のヘラケズリの痕跡が残る。30は須恵器杯B蓋である。いずれも平城宮VI段階のもの⁴⁾と考えられる。

竪穴建物107 建物埋土から土師器杯・製塩土器・甕、須恵器杯A・甕、平瓦、鉄釘などが出土した。貼床中からは土師器甕・製塩土器が出土した。

31・32は土師器甕である。31は口縁端部を外上方に摘み上げ1条の凹線をめぐらす。体部外面は縦方向のハケメ、内面はナデで仕上げる。内面にはユビオサエが残る。32は口縁部が大きく開き、端部には1条の凹線をめぐらす。体部外面はハケメ、内面はナデで仕上げる。33は須恵器杯Aである。

竪穴建物135 建物埋土から土師器杯・甕、須恵器杯・壺などが出土した。壁溝からは丸瓦が出土した。貼床中からは土師器甕が出土した。

34は土師器甕である。口縁部は内弯しながら立ち上がり、端部は尖りぎみにおさめる。摩滅のため調整は不明。35・36は須恵器の杯Aである。口径は10.0cmと10.2cmと小型で、器壁は薄くシャープなつくりである。

竪穴建物1093 床面直上から完形の須恵器杯A (37) が出土した。底部は未調整である。7世紀中葉頃の所産と考えられる。ほかに埋土から土師器杯の小片が出土している。

土坑195 土坑埋土から土師器の製塩土器 (38) が出土した。胎土は粗く、粘土紐接合痕跡が明瞭に残る。二次焼成を受ける。

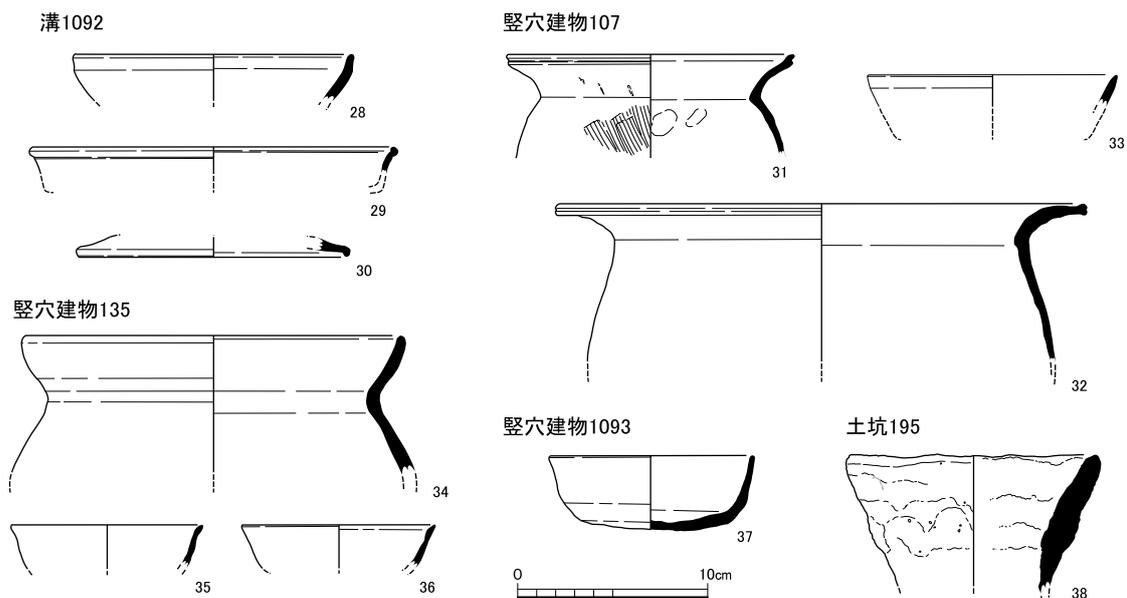


図35 奈良時代土器実測図 (1:4)

表4 土器一覽表

No.	器種	器形	出土遺構	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	残存率 (%)	色調 胎土	備考
1	山茶椀	椀	溝586		(1.4)	(5.3)	20	2.5Y7/1灰白色～6/1黄灰色 断面2.5Y7/1灰白色。胎土精良。	
2	土師器	皿	掘立柱建物1	(6.2)	(1.85)		20	10YR8/2灰白色 断面10YR8/1灰白色。胎土精良。	柱穴525
3	土師器	皿	掘立柱建物1	(15.4)	(1.9)		10	7.5YR8/3浅黄橙色 断面7.5YR8/2灰白色。胎土精良。	柱穴536柱当り
4	土師器	皿	堀1	(6.8)	1.8		20	10YR8/2灰白色～8/3浅黄橙色 断面10YR8/2灰白色。胎土精良。	柱穴1083
5	土師器	皿	堀1	(14.6)	(2.3)		10	7.5YR8/2灰白色～8/3浅黄橙色 断面7.5YR8/1灰白色。胎土精良。	柱穴1084
6	土師器	皿	堀1	(15.6)	(2.5)		40	7.5YR8/6浅黄橙色。胎土精良。	柱穴561
7	青磁	椀	堀1		(2.4)	5.3	底部 100	釉10Y6/2～5/2オリーブ灰色。胎土精良。	柱穴1084 龍泉窯
8	土師器	皿	井戸501	(14.6)	(2.0)		20	10YR8/1～8/2灰白色 断面10YR8/1灰白色。胎土精良。	木枠内
9	土師器	皿	井戸501	(14.8)	2.45		40	10YR7/2にぶい黄橙色。胎土精良。	木枠内
10	土師器	皿	井戸501	(15.3)	2.5		20	10YR7/4にぶい黄橙色。胎土精良。	木枠内
11	焼締陶器	搦鉢	井戸501	(28.0)	(14.5)		20	外面5YR5/4にぶい赤褐色 内面5YR5/3にぶい赤褐色 断面10YR7/1灰白色。胎土やや粗、φ0.5～7mmの砂粒含む。	石組内、備前
12	瓦質土器	火鉢	井戸501				15	N3/0暗灰色 10YR6/4にぶい黄橙色 断面2.5Y7/1灰白色～7/2灰黄色。胎土精良。	石組内
13	瓦質土器	風炉	井戸501	28.0	27.0	30.4	20	N4/0灰色 断面5Y7/1灰白色。胎土やや粗、石英・チャート・長石粒含む。	石組内
14	須恵器	杯	掘立柱建物3	(12.4)	(2.95)		5	N7/0灰白色～6/0灰色 断面N7/0灰白色。胎土精良。	柱穴41
15	土師器	皿	土坑396	(17.0)	(1.4)		10	7.5YR7/6～6/6橙色。胎土精良。	
16	土師器	皿	土坑396	(18.8)	(1.9)		5	7.5YR7/4～6/4にぶい橙色。胎土精良。	
17	須恵器	壺	土坑396	3.5	(3.8)		20	N4/0灰色～3/0暗灰色。胎土精良、黒色粒中量含む。	
18	青磁	唾壺	土坑396	14.6	(8.3)		90	2.5Y7/1灰白色。	越州窯
19	土師器	皿	土坑182	(10.8)	(1.5)		20	10YR8/4浅黄橙色。胎土精良。	
20	土師器	皿	土坑182	(13.0)	(1.3)		20	10YR8/4浅黄橙色～7/4にぶい橙色 断面10YR8/3浅黄橙色。胎土精良。	
21	土師器	皿	土坑182	(13.6)	(1.9)		10	7.5YR8/4浅黄橙色～7/4にぶい橙色 断面7.5YR7/4にぶい橙色。胎土精良。	灯明皿か、口縁一部炭付着
22	土師器	皿	土坑182	(14.2)	(1.45)		20	7.5YR8/4浅黄橙色～7/4にぶい橙色 断面7.5YR8/4浅黄橙色。胎土精良、クサリレキ含む。	
23	土師器	甕	土坑182	(19.0)	(3.3)		25	10YR8/2灰白色～7/2にぶい黄橙色 断面10YR8/2灰白色。胎土精良。	
24	土師器	甕	土坑182	(21.9)	(4.9)		40	7.5YR7/4にぶい橙色 断面10YR5/1褐灰色。胎土精良。	
25	土師器	甕	土坑182	(21.0)	(7.7)		20	外面7.5YR5/4にぶい褐色 内面5YR6/4にぶい橙色 断面5YR5/4にぶい赤褐色。胎土精良。	
26	土師器	高杯	土坑182		(7.7)		10	10YR8/3浅黄橙色～7/3にぶい黄橙色 断面10YR8/3浅黄橙色。胎土精良。	
27	須恵器	蓋	土坑182	(9.6)	(2.55)		20	外面N4/0灰色～3/0暗灰色 内面N6/0灰色 断面N4/0灰色。胎土精良。	
28	土師器	椀	溝1092	(14.4)	(2.4)		5	5YR5/4にぶい赤褐色 断面5YR5/6明赤褐色。胎土精良。	
29	土師器	皿	溝1092	(19.0)	(1.4)		5	5YR7/6～6/6橙色。胎土精良。	
30	須恵器	蓋	溝1092	(14.2)	(1.0)		10	外面2.5Y6/1～5/1黄灰色 内面・断面N7/0灰白色～6/0灰色。胎土精良。	
31	土師器	甕	竪穴建物107	(15.0)	(5.5)		20	7.5YR6/4にぶい橙色 断面7.5YR7/4にぶい橙色。胎土精良、φ0.5～2mmのチャート少量、クサリレキ少量含む。	
32	土師器	甕	竪穴建物107	(28.0)	(8.3)		25	外面10YR8/4浅黄橙色 内面10YR8/3浅黄橙色 断面10YR8/4浅黄橙色。胎土やや粗、φ0.5～4mmの石英・長石多量、クサリレキ多量含む。	
33	須恵器	杯	竪穴建物107	(13.2)	(1.7)		20	10YR8/1～8/2灰白色 断面10YR8/1灰白色。胎土精良。	
34	土師器	甕	竪穴建物135	(19.6)	(7.2)		20	外面・断面5YR6/6橙色 内面2.5Y4/2暗灰黄色。胎土精良、φ0.5～2mmの石英・長石少量含む。	
35	須恵器	杯	竪穴建物135	(10.0)	(2.3)		10	5Y7/1灰白色 断面5Y6/1灰色。胎土精良。	
36	須恵器	杯	竪穴建物135	(10.2)	(2.3)		25	5Y7/1灰白色～6/1灰色 断面5Y8/1～7/1灰白色。胎土精良。	
37	須恵器	杯	竪穴建物1093	10.6	4.1		100	2.5Y7/1灰白色～6/1黄灰色。胎土精良、φ0.5～1cmの白色粒少量含む	
38	土師器	鉢	土坑195	(13.0)	(7.0)		20	外面7.5YR7/4にぶい橙色 内面2.5Y8/3淡黄色。胎土粗、φ1～5mmの石英・長石、チャート多量含む。	製塩土器

(2) 瓦類 (図36)

瓦類の出土は、非常に少ない。細片が多いが、全て奈良時代から平安時代前期に帰属するものと考えられる。同時代の遺構に伴うものは少なく、後世の遺構に混入した状態で出土したものが多。比較的残りの良い7点を図示した。軒瓦の出土は図示した1点のみである。

瓦1は単弁16弁蓮華文軒丸瓦である。土坑182から出土した。平城宮式6133D型式の搬入品と考えられる。胎土は精良で焼成は軟質、色調は外面灰色、胎土は灰白色を呈する。瓦2は丸瓦である。堅穴建物135の壁溝から出土した。凸面ナデ調整、凹面は布目がつく。胎土はやや粗く焼成は軟質、色調は灰白色～浅黄橙色を呈する。瓦3～7は平瓦である。瓦3は凹面布目、凸面は平行タタキである。胎土は精良で焼成は硬質、色調は外面青灰色、断面はにぶい褐色を呈する。土坑182から出土した。瓦4は凹面布目、凸面格子タタキで側面はヘラケズリする。胎土はやや粗く焼成は軟質、色調は灰白色を呈する。堅穴建物内の土坑395から出土した。瓦5は凹面布目、凸面格子タタキで側面はヘラケズリする。胎土は精良で焼成は軟質、色調は浅黄色を呈する。溝1092から出土した。瓦6は凹面布目、凸面格子タタキである。胎土は精良で焼成は硬質、色調は灰白～黄灰色を呈する。井戸501から出土した。瓦7は凹面布目、凸面格子タタキで側面はヘラケズリする。胎土は精良で焼成は硬質、色調は灰色を呈する。溝1092から出土した。

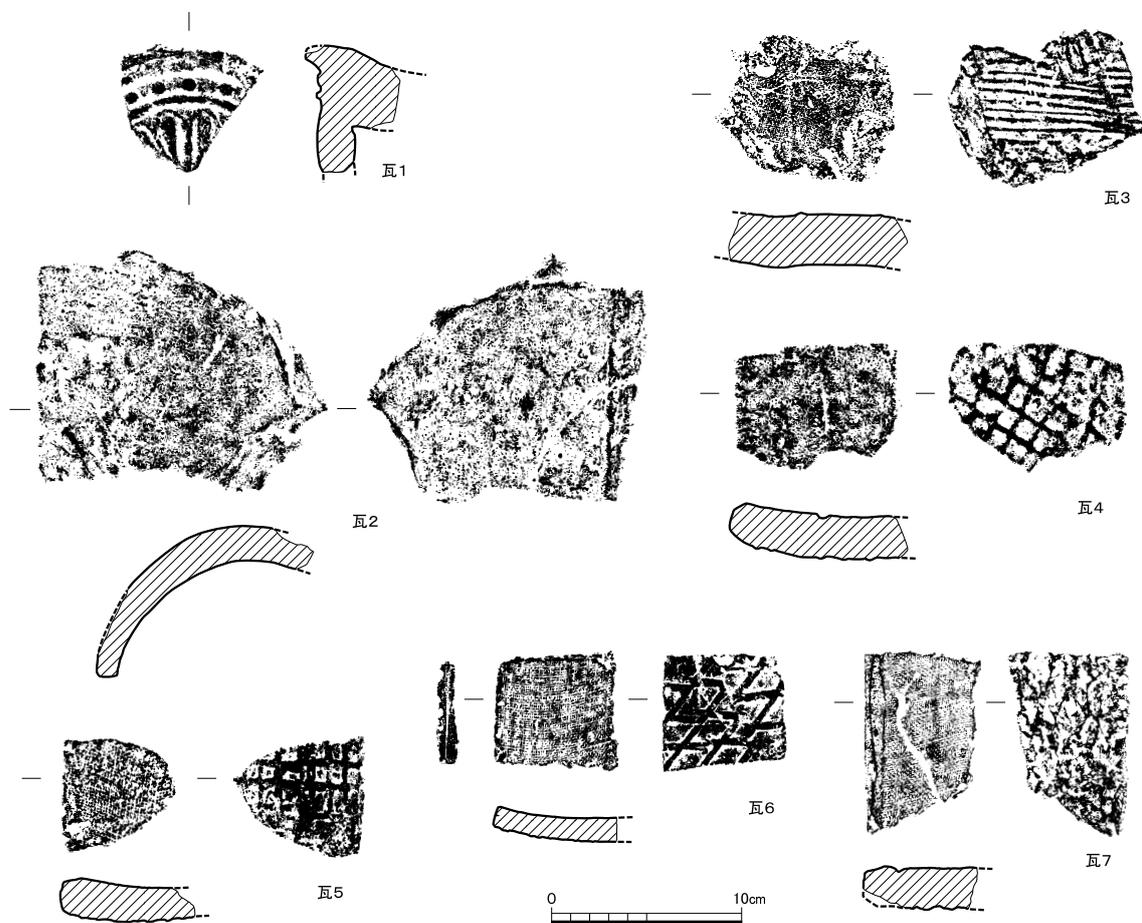


図36 瓦拓影および実測図 (1 : 4)

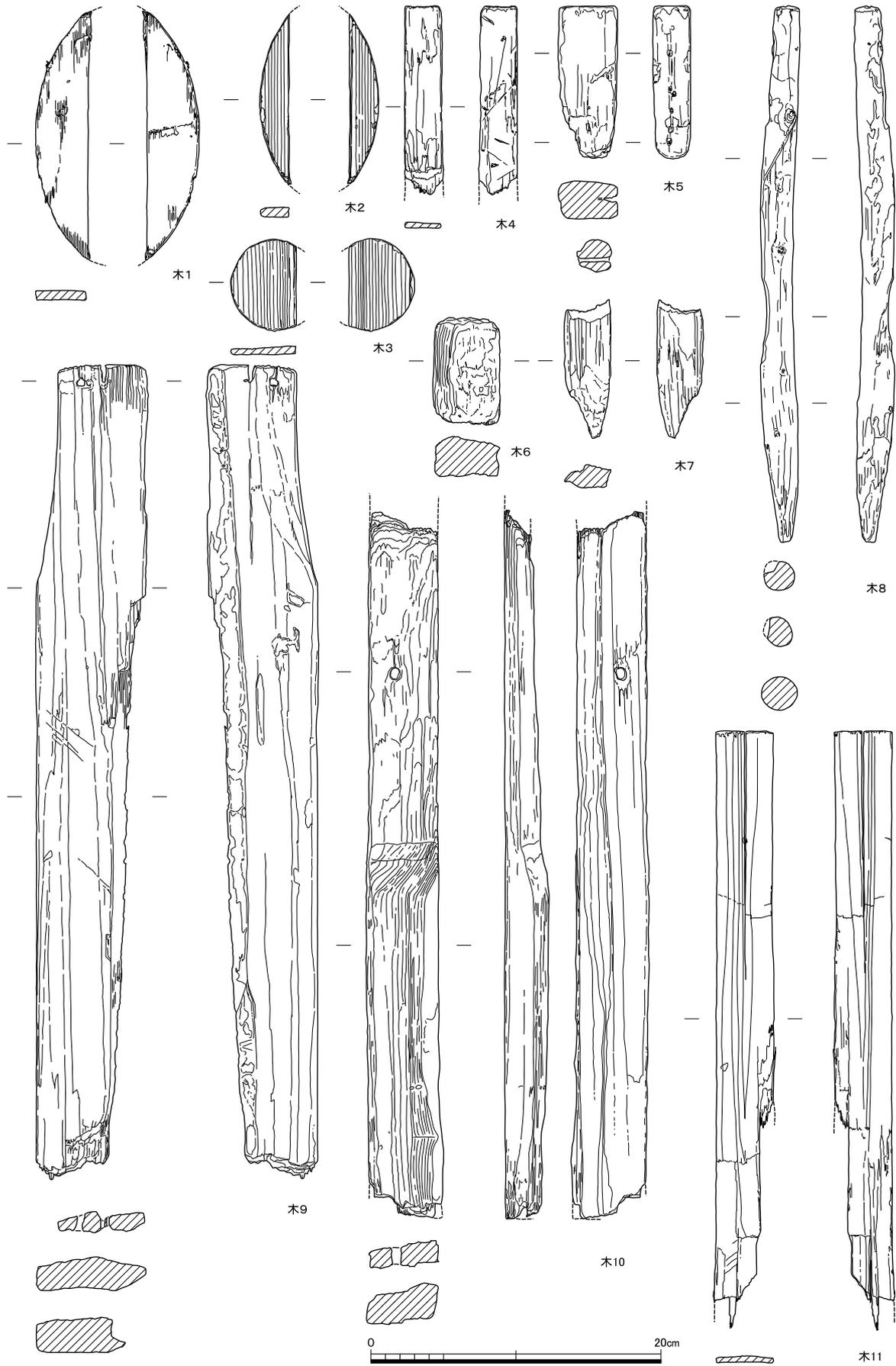


图37 井戸501出土木製品実測图 (1 : 4)

(3) 木製品 (図37)

木製品は全て井戸501から出土した。木1～3は、曲物の蓋である。木1はヒノキ、木2・3はスギである。木4は、札状木製品である。残存長13.1cm、幅約2.6cm、厚さは約0.4cmある。樹種はスギ。木5は部材と考えられる。残存長10.6cm、幅約4.1cm、厚さは約2.6cmある。表面に1箇所、側面に6箇所の釘穴があく。樹種はヒノキである。木6も方形に加工されており、部材の可能性はある。長さ約7.5cm、幅約4.6cm、厚さは約2.8cmある。樹種はスギである。木7・8は杭状木製品である。木7は残存長9.7cm、最大幅約3.2cm、最大厚は約1.6cmある。先端は黒く炭化する。樹種は二葉マツ。木8は、自然木の先端を削って尖らせたもので、完存する。長さ37.3cm、最大径は2.3cmある。樹種はムクノキである。木9・10は部材である。木9は板状に加工され、上端に釘穴が並列して2箇所あく。残存長は56.6cm、最大幅約7.8cm、最大厚は約2.4cmある。樹種はスギである。木10は板状に加工されるが、途中で厚みが変わる。釘穴が1箇所あく。残存長49.1cm、最大幅約5.0cm、厚みは上方で約1.5cm、下方で約3.0cmある。樹種はスギである。木11は木筒状木製品である。残存長41.7cm、最大幅約4.0cm、最大厚は約0.4cmある。樹種はスギである。

(4) 石製品 (図38)

平安時代中期の土坑187から砥石が1点出土した。一端を欠損する。平面形は長方形で、残存長13.3cm、最大幅6.7cm、最大厚は約3.5cmある。表面裏面ともに砥面として使用され、面が残る部分については全面が平滑になる。裏面中央には浅い溝が一本はしる。砥溝の可能性はある。両側面は自然面が残る。石材は砂岩である。

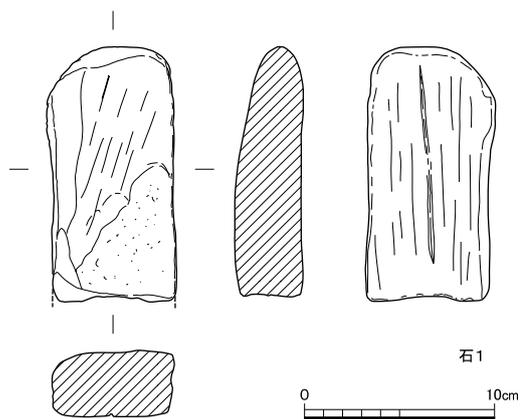


図38 石器実測図 (1 : 4)

註

- 1) 土器の型式については小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1996年に準拠する。
- 2) 佐藤亜聖「中世後期の流通と瓦質土器」『考古学と室町・戦国期の流通－瀬戸内海とアジアを結ぶ道－』高志書院 2011年
- 3) 須恵器の器種名は『平城宮発掘調査報告XVI』奈良文化財研究所 2005年に準拠する。
- 4) 西 弘海「平城宮I～VIIの大別」『平城宮発掘調査報告VII』奈良国立文化財研究所 1976年

5. まとめ

(1) 飛鳥・奈良時代の集落の様相 (図39)

今回の調査で見つかった中で最も古い遺構は、7世紀中葉頃の須恵器が出土した竪穴建物1093である。その後、8世紀後半まで竪穴建物と掘立柱建物が築かれている。平安京遷都直前まで続いた集落である可能性が高い。この時期の建物は、掘立柱建物、竪穴建物ともに方位が北に対して西に振れる。竪穴建物1093を削平する溝1092は、比較的規模が大きいことから、集落内の排水を兼ねた区画溝としての用途が考えられるが、平安京遷都直前の8世紀末に人為的に埋め戻されている。

調査地周辺でも、同じく7世紀中葉から8世紀代の遺構が多数見つかっている。掘立柱建物、総柱建物、竪穴建物で構成され、今回の調査と同様に方位は北に対して西に振れるものが多く、同一の集落と考えられ、花園遺跡が東に大きく広がるものと捉えられる。このように調査地一帯の開発は7世紀中葉頃に開始されるが、その時期が調査地北東に位置した北野廃寺の建立とほぼ同時期であることが注目される。北野廃寺周辺の集落としては、寺域と重複する北野遺跡が存在する。北野遺跡の集落開発は古墳時代に遡るが、竪穴建物が7世紀前葉を最後に途絶えることから、寺院造営に伴って集落を移動させた可能性が指摘されている¹⁾。それに続く時期に、今回の調査地周辺で集落の開発が始まっている。北野廃寺跡では、飛鳥時代から奈良時代の瓦窯が5基見つかっているが、瓦窯出土地から今回の調査地までは直線距離では約400mである。今回の調査で竪穴建物や溝から奈良時代の瓦が複数出土していることも、瓦工人あるいは北野廃寺の造営、維持に関わった集団の集落である可能性を示唆するものとして評価したい。

(2) 平安時代の遺構と「宇多院」(図40・41)

平安京遷都に伴い、調査地は平安京右京北辺三坊六町に位置するようになる。第2章第1節でも触れたように、『拾芥抄』では宇多上皇の後院「宇多院」があったとされる町である²⁾。しかし、今回の調査で見つかった平安時代の遺構は多くはない。建物として捉えられるものとしては平安時代前期の掘立柱建物3・4の2棟のみである。また、中期の遺構としては越州窯青磁唾壺を納めた土坑396と、廃棄土坑と考えられる土坑182があり、周囲に建物が存在したと推測されるが、今回の調査では確認できなかった。平安時代に帰属する遺物も非常に少ない。そこで、周辺調査を含めた平安時代の当地周辺の様相について、検討したい。

図40は平安時代前期前半、図41は前期後半から中・後期の調査地周辺の成果をまとめたものである。調査1・2の花園団地建設に伴う調査は、国土座標に基づいた調査が行われていない時期のものである。そのためこれまでは、検出された条坊側溝とされる溝と平安京の条坊復元モデルを重ねる形で調査地の位置が推定されていた³⁾。しかし、当時の調査担当者から、条坊側溝とした溝から室町時代や近世の遺物が出土していたとの証言を得て、本報告書を作成するにあたり、調査報告書

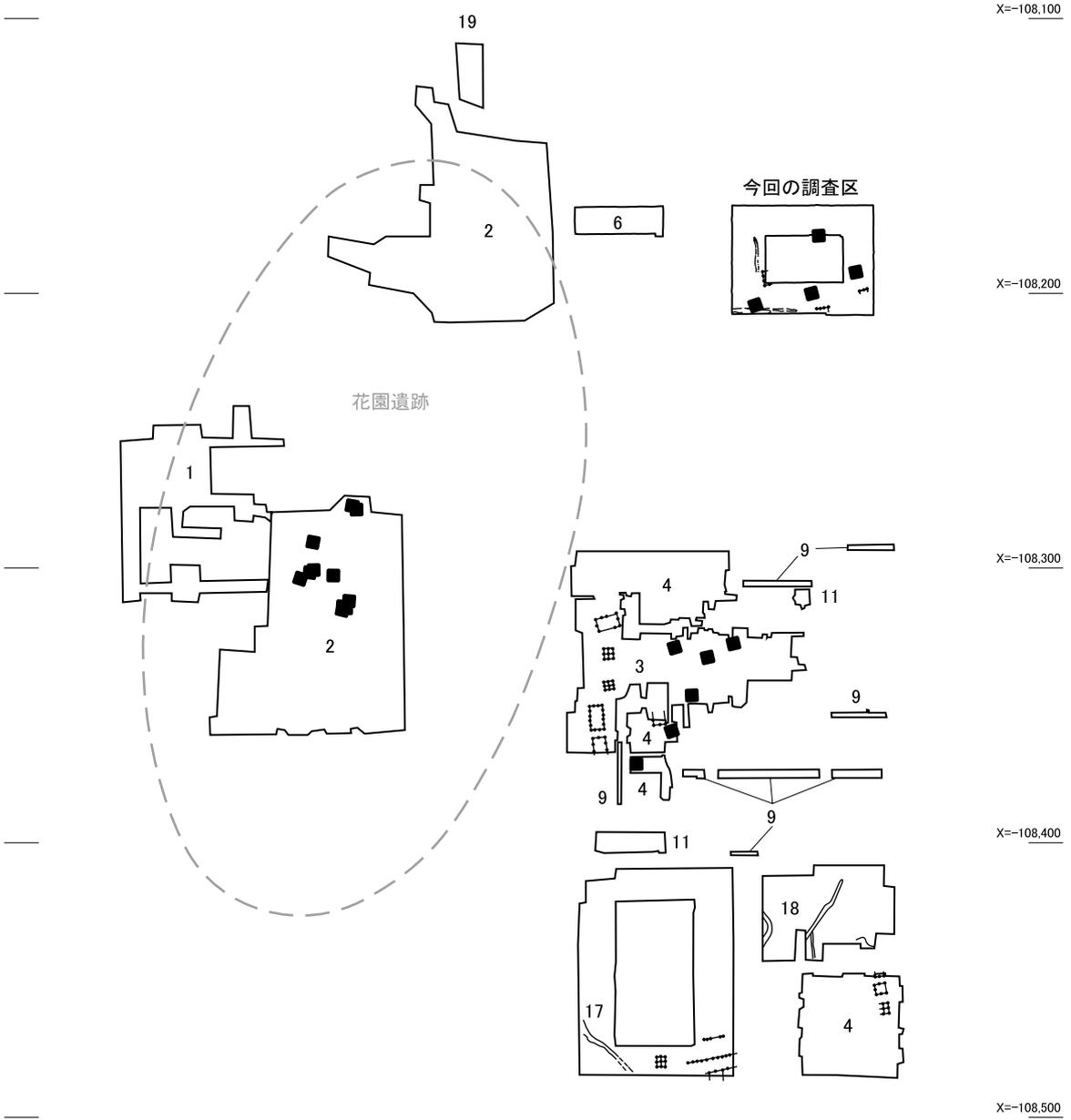


Y=-25,200

Y=-25,100

Y=-25,000

Y=-24,900



※調査番号は図7と対応する



図39 奈良時代遺構分布図 (1 : 2,500)

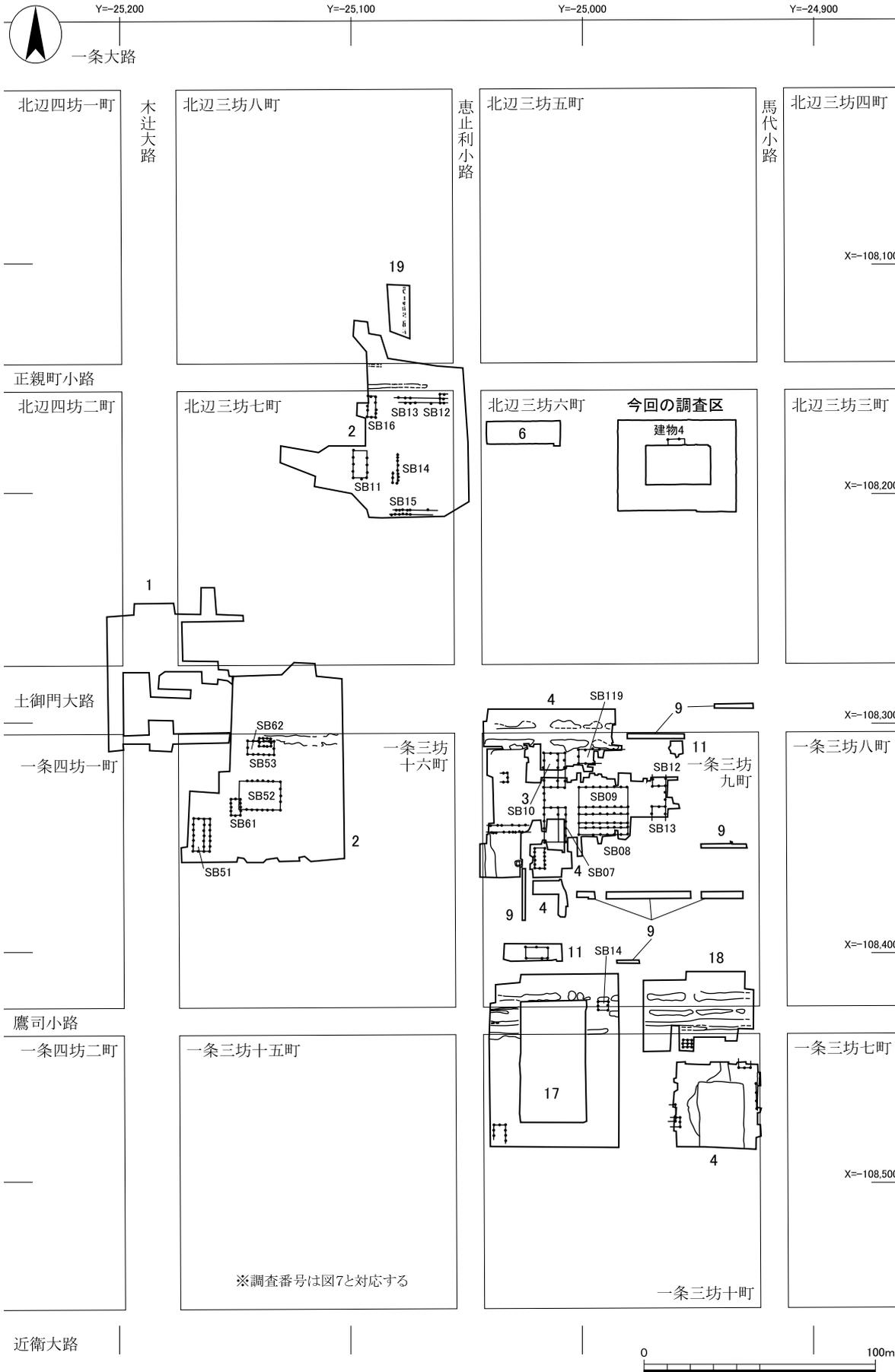


図40 平安時代前期前半遺構分布図 (1 : 2,500)

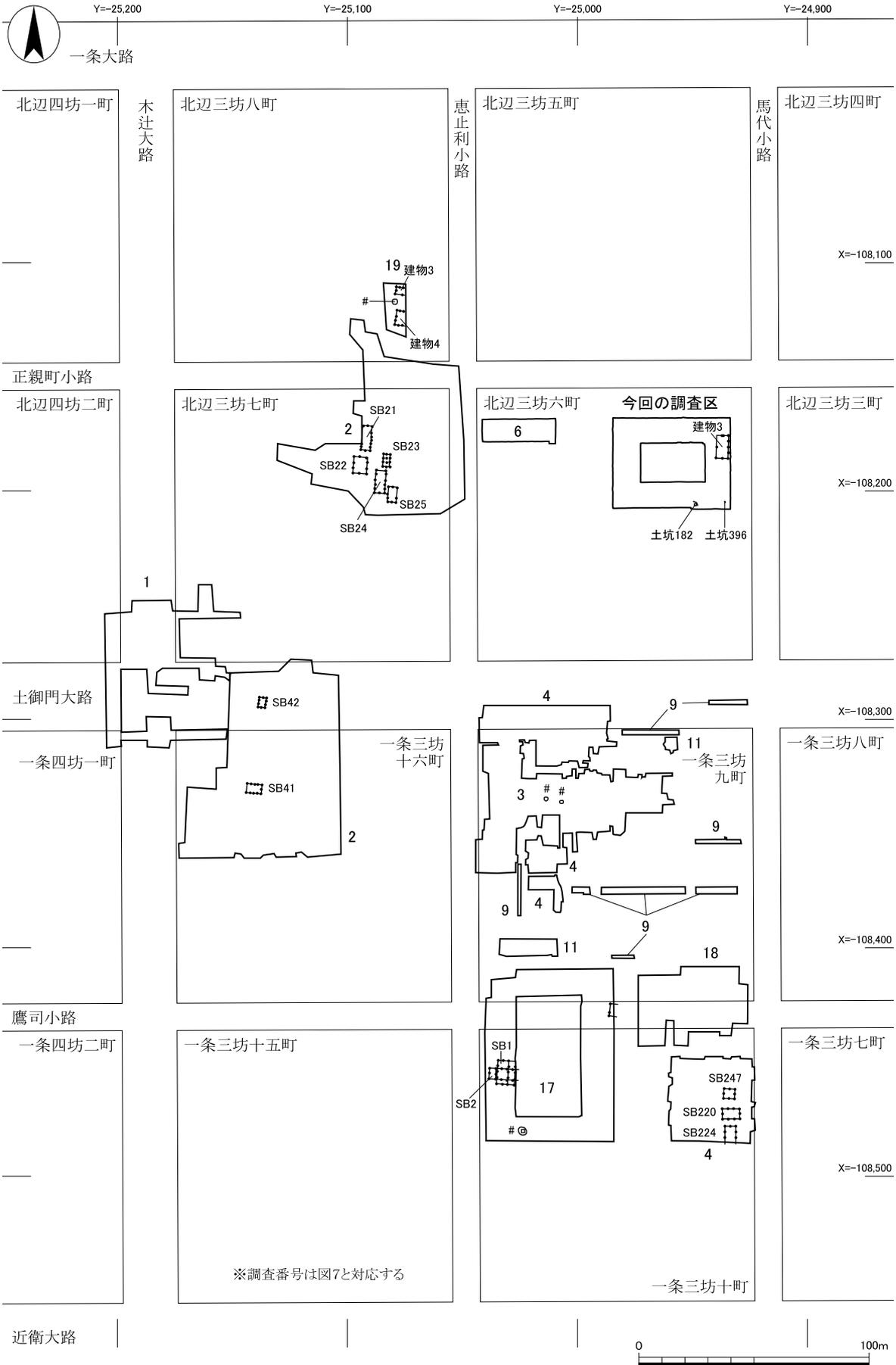


図41 平安時代前期後半から中・後期遺構分布図（1：2,500）

に記載されたトレンチ図⁴⁾と当時の航空測量写真データをもとに、現在の道路・建物、隣地境界などから位置を割り出した。その結果、調査1・2ともに、これまで推定されてきた位置より約10m西に位置することが判明した。木辻大路の側溝とされた溝も条坊復元ラインから大きく外れることから、条坊側溝ではない可能性が高いと判断し、今回の分布図への掲載は見送った。

まず平安時代前期前半段階(図40)から見ると、北辺三坊七町跡で前期初頭とされる建物群が検出されている(調査2)。七町北東隅の梁行2間、桁行1間の建物を北門SB12とし、その西に並列する2本の柱列SB13が南に折れ、SB14・SB15とつながって回廊となる復元案が提示され、これが宇多院の中央南寄りに位置することから、宇多院もしくはその前身施設の中枢部と推測された⁵⁾。しかし、門としたSB12の柱穴規模は小さく、形状も不整形なものが多い。また、回廊とした柱列の柱間は不等間ではばらつきが大きく、西側は大きく途切れ連続性は不明瞭である。さらに回廊とした遺構の内側では顕著な遺構が見つかっておらず、この復元には再検討の余地があると考えられる。そもそも宇多院は『拾芥抄』の記載によれば左大臣源融の所領であったものをその子の源湛が受け継ぎ、その後宇多上皇の後院となったとされるものである。一方、目崎徳衛氏は、源湛が薨じた延喜15年(915)より前の延喜7年(907)に上皇の子敦実親王の元服が宇多院で行われたとの記述が『扶桑略記』に見られる⁶⁾ことから『拾芥抄』の記述は誤りで、宇多野に上皇の父光孝天皇が仁和寺を創建していることなどから、この辺りが時康親王(光孝天皇)ゆかりの地で、古くから御殿と所領が存在し、後の宇多院に継承された⁷⁾と推測している。しかし、源融・湛からの伝領、光孝天皇からの伝領のいずれにした場合でも、源融の活躍は9世紀半ば以降で、時康親王の元服は承和12年(845)であることから、前期初頭にまで遡るとは考えにくく、この段階で2町以上を占有する邸宅があったかについては疑問が残る。

ただし、調査2で見ついている南北棟建物SB11は桁行柱間が10尺あり、柱穴規模も一辺1～1.5mと大きい。今回の調査で見つかった掘立柱建物4も8尺等間と考えられ、柱穴規模は一辺0.8mほどある。1町南で見ついているSB07・10・12・13(調査3)やSB51(調査2)に匹敵する規模である。一条三坊九町跡のSB07・10・12・13は、正殿SB08(建て替え後SB09)を後殿SB119とともにコの字形に囲む脇殿である。一条三坊十六町跡のSB51も、身舎が礎石建ちで四面庇が掘立柱の正殿SB52と後殿SB53に伴う脇殿と考えられ、九町・十六町ともに、1町を占有する邸宅であったと考えられる。この辺り一帯が平安京造営当初に1町以上を占地する宅地が置かれた地域であったとするならば、北辺三坊七町、あるいは今回の調査地の北辺三坊五町域も同様であった可能性も残る。

次いで、平安時代前期後半以降の遺構分布を見て行きたい。前期前半の建物は正方位を向くか、振れがわずかであるものが多いのに対し、前期後半以降の建物は北に対して東に振れるものが多くを占める。今回の調査で検出した掘立柱建物3からは前期前半の遺物が出土したが、方位の触れから正方位を向く掘立柱建物4よりは新しくなると判断した。その他のこの時期の建物跡としては、北辺三坊七町跡では前期後半の総柱建物を含む掘立柱建物群が見ついている(調査2)。また、北辺三坊八町跡では平安時代末頃の建物3・4と井戸が見ついている(調査19)。南側では

一条三坊九町跡で中期以降のものと考えられる井戸2基（調査3）、一条三坊十町跡では前期の池SG177が埋まった後に建てられたとされるSB220・224・247（調査4）、中期以降とされるSB1・2と前期末の井戸（調査17）などが見つかっているが、いずれも小規模である。明確に中期に属すると考えられる遺構は今回の調査で検出した9世紀末の土坑396と10世紀中頃の土坑182などに限定される。

宇多天皇が敦仁親王（醍醐天皇）に譲位し、上皇となったのは寛平9年（897）であり、その後承平元年（931）に仁和寺御室で崩御するまで権勢を誇ったとされる。しかし、その宇多上皇の後院として栄えた宇多院とされる今回の調査地周辺で中期前半の遺構・遺物が少ないことは問題となろう。ひとつには、後世に遺構が削平された可能性がある。しかし、井戸など深い遺構は残る可能性が高く、また一定程度の居住の実態があれば、後世の遺構に混入して中期の遺物がある程度出土すると思われるが、それも非常に少ないことから単純に削平されたのではないと考えたい。次に考えられる可能性は、調査地が宇多院の中心域をはずれている場合である。宇多院とされる4町のうち、北側の北辺三坊五町・八町跡では、大規模な調査は実施されていない。また、目崎徳衛氏は「実は譲位後の宇多上皇が宇多院を居所とした微証は管見に入らず、そこに宇多院の特殊性があることを注目しなければならない⁸⁾」と述べており、宇多院は各地・各方面からの上皇への供御を管掌する機関であったとされる。居住の実態がなかったとすれば、院の御所となり得る大規模な建物は必要なく、生活消耗品である土器類の出土が少ないことも説明が可能となる。また、供物を管理する倉庫としては、北辺三坊七町跡で見つかっている建物群の規模でも不足はないと考えられる。さらに、今回の調査で土坑396から出土した越州窯青磁唾壺は、平安京内では2例目の出土となる⁹⁾。全国的に見ても出土例は少なく稀少性の高いもので、上流階層の所有物と考えられる。ここに宇多院が所在したと積極的に評価する場合には一つの材料と成り得る可能性がある。

最後に、宇多院推定地で平安時代中期の遺構・遺物の出土が少ない要因の別の可能性として、『拾芥抄』『西京圖』の宇多院の記載位置が誤っている場合を挙げておきたい。宇多院と呼称されながら、平安京条坊の宇多小路に面していないことは不自然であり、実際『拾芥抄』本文には「・・・、或抄云、西京宇多小路、但此小路当尻東行」と記されている。本文に従い宇多小路に面した位置にあったとすれば、小路東にあった場合3町分のずれが生じ、「西京圖」とは全く重ならないことになる。また小路西にあった場合は1町分のずれとなり、北辺三坊五・六町はそのまま宇多院の範囲に含まれることになるが、これも実際に宇多院が4町を占めたとの仮定によるものであり、「西京圖」以外ではその根拠となる史料は管見ではない。

以上のように、宇多院については所在地や規模、機能などについて不確定な要素が多い。今後はより広範囲、特に宇多小路に面した地域の調査にも注意を払い、宇多院の実態を解明していく必要がある。

(3) 室町時代後期の遺構群の性格 (図42)

今回の調査では、第1-2面で鎌倉時代から室町時代前期のものと考えられる耕作に関連する溝を多数検出した。平安京右京衰退後は、耕作地として使用されていたことがわかる。しかし、室町時代後期、16世紀初頭頃にそれらの溝を埋めて、掘立柱建物1、堀1、井戸501などが構築される。周辺調査でも、同時期の掘立柱建物が見つかった(調査6・19)。今回の調査で見つかった掘立柱建物1や調査6で検出された掘立柱建物は、柱と柱の間隔が狭いことや間仕切りを持つことから、土壁構造の蔵のような建物であると考えられる。また、掘立柱建物1の北に位置する井戸501は堀1に囲われた空間にあり、規模は室町時代の石組井戸としては京都市内最大級の大きさを誇る。その底に天端をそろえて据えられた2石は、水が溜まると透けて見え、庭園における景石に相当する役割を持つと考えられる。また、この井戸は水が枯れないように土ではなく拳大の石で埋め戻されており、再利用する意図があったと推測される。規模や配置、埋め方から見て町家の井戸などとは異なり、特殊な用途に使用された井戸である可能性が高い。この用途について考えてみたい。

中世の調査地一帯は、「大將軍保」として北野天満宮(以下「北野社」という)の管理のもとに置かれていた。¹⁰⁾大將軍保を含む北野社領西京一帯の住人は「西京神人」と呼ばれ、酒麴業を営み、賦課の優遇や麴生産の権利を北野社に庇護してもらい代わりに、利益を北野社に還元するという関係にあったが、室町時代後期に至って「西京七保」として再編成され、保ごとに神供や祭礼役を

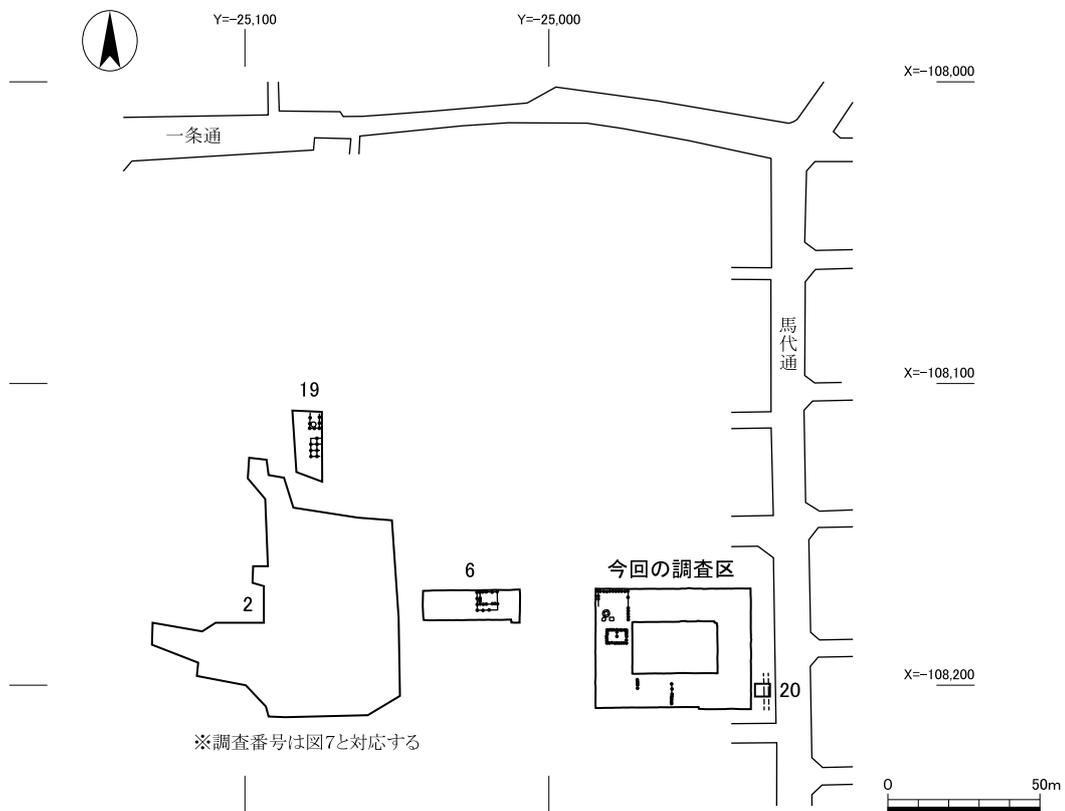


図42 中世遺構分布図 (1:2,500)

担ったとされる¹¹⁾。大將軍保は西京七保のうちの「三保」とされ、割木の納入や堀の埋め戻しなどを北野社から命じられるなど、中世を通して北野社と密接な関係にあったことがわかる。ここで、井戸501の出土遺物を見ると、瓦質土器の風炉が出土している（図33-13）。風炉は、一般的に茶事に用いられるもので、日常雑器ではない。寺院・城館・屋敷の中心部から出土する傾向にあり、領主・武士階層・僧侶を主な対象とした品物であるとされる¹²⁾。大將軍保と北野社との関係に加えて、風炉の出土という点から見て、この井戸とその周囲の掘立柱建物群は、北野社が関与した祭祀行為や生産活動に関わるものであった可能性が考えられる。周辺調査での成果の蓄積が待たれるが、中世の当地周辺の住人の性格を考える上で、重要な発見であったと言えよう。

註

- 1) 鈴木久史「北野廃寺」『第19回 京都府埋蔵文化財研究会 発表資料集 古代寺院と律令体制化の京都府～なぜそこに寺はあるのか～』京都府埋蔵文化財研究会 2013年
- 2) 第2章でも触れたように、『拾芥抄』の付図「西京圖」には、当町を含む右京北辺三坊五町から八町の4町に「左大臣 融領」「宇多院」との記入がある。また、『拾芥抄』本文には、「宇多院 土御門北、木辻東、此小路當東洞院、法皇御所、刑部卿源湛宅云云、或抄云、西京宇多小路、但此小路当町尻東行」と記載される。『改定増補 故実叢書22巻 禁秘抄考註・拾芥抄』明治図書出版株式会社 1993年
- 3) 京都府教育庁指導部文化財保護課編『埋蔵文化財発掘調査概報（1980-3）』京都府教育委員会 1980年の第44図、山田邦和「第三章 左京と右京 1 平安京の概要」『平安京提要』角川書店 1994年の図5、『平安京右京北辺三坊八町（宇多院）跡』京都府埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-2 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2006年の図3など。
- 4) 「住宅公団花園鷹司団地建設敷地内埋蔵文化財発掘調査概報-平安京右京土御門木辻-」『埋蔵文化財発掘調査概報集1976』鳥羽離宮跡調査研究所 1976年の図7
- 5) 前掲註4文献に同じ
- 6) 『扶桑略記』延喜七年十一月二十二日条「乙未、敦実親王、今日、於宇多院、加元服之由、……」
- 7) 目崎徳衛氏「宇多上皇の院と国政」『貴族社会と古典文化』吉川弘文館 1995年
- 8) 前掲註7文献に同じ
- 9) 平尾政幸「11 平安京右京六条一坊」『平成3年度 京都市埋蔵文化財調査概要』財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1995年の図41の34・37が同一個体で越州窯青磁唾壺となることを確認した。
- 10) 「大將軍村」『史料京都の歴史 第6巻 北区』平凡社 1993年
- 11) 三枝暁子「北野社西京七保神人の成立とその背景」『比叡山と延暦寺』財団法人東京大学出版会 2011年
- 12) 佐藤亜聖「中世後期の流通と瓦質土器」『考古学と室町・戦国期の流通』高志書院 2011年

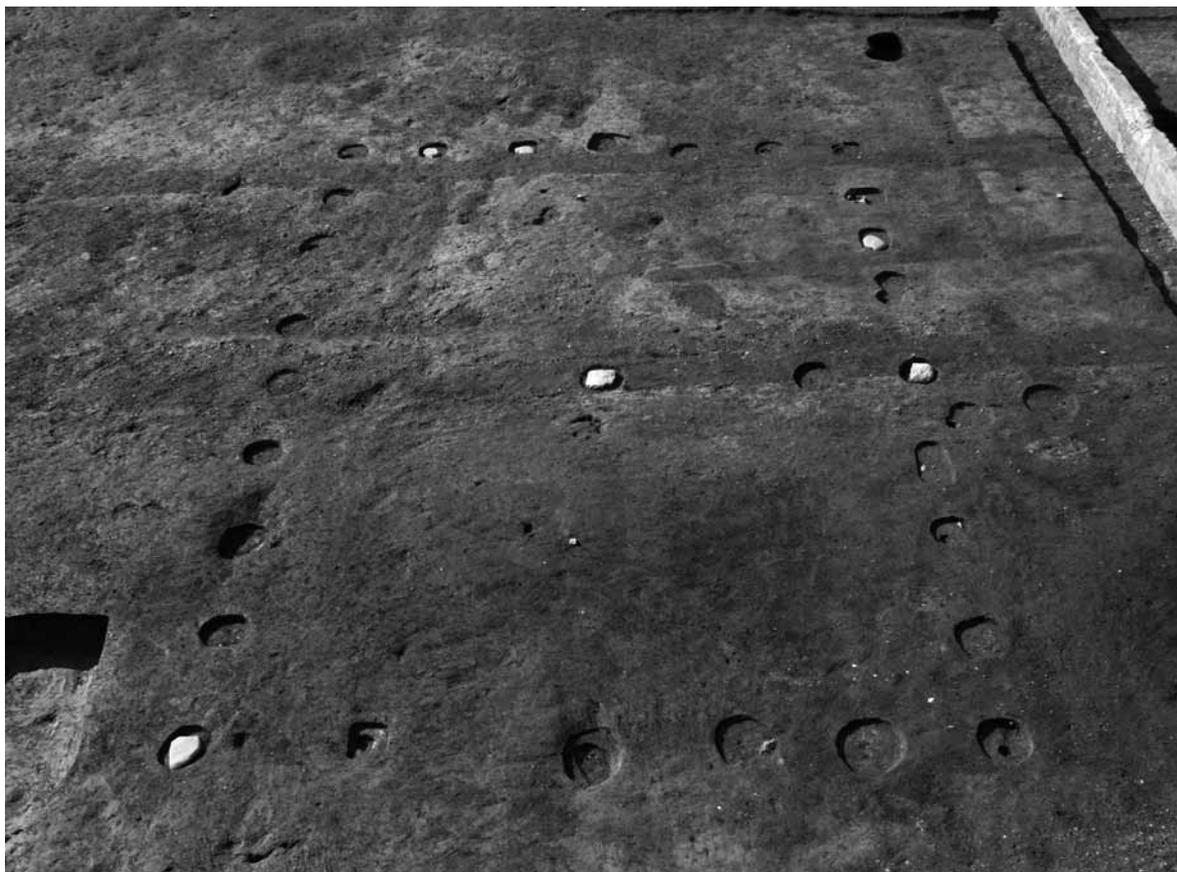
圖 版



1 第1-1面全景（西から）



2 塀1、井戸501（南東から）



1 掘立柱建物1 (東から)



2 掘立柱建物1 柱穴536 (東から)



4 堀1 柱穴561 (東から)



3 掘立柱建物1 柱穴538 (東から)



5 堀1 柱穴1080 (北から)



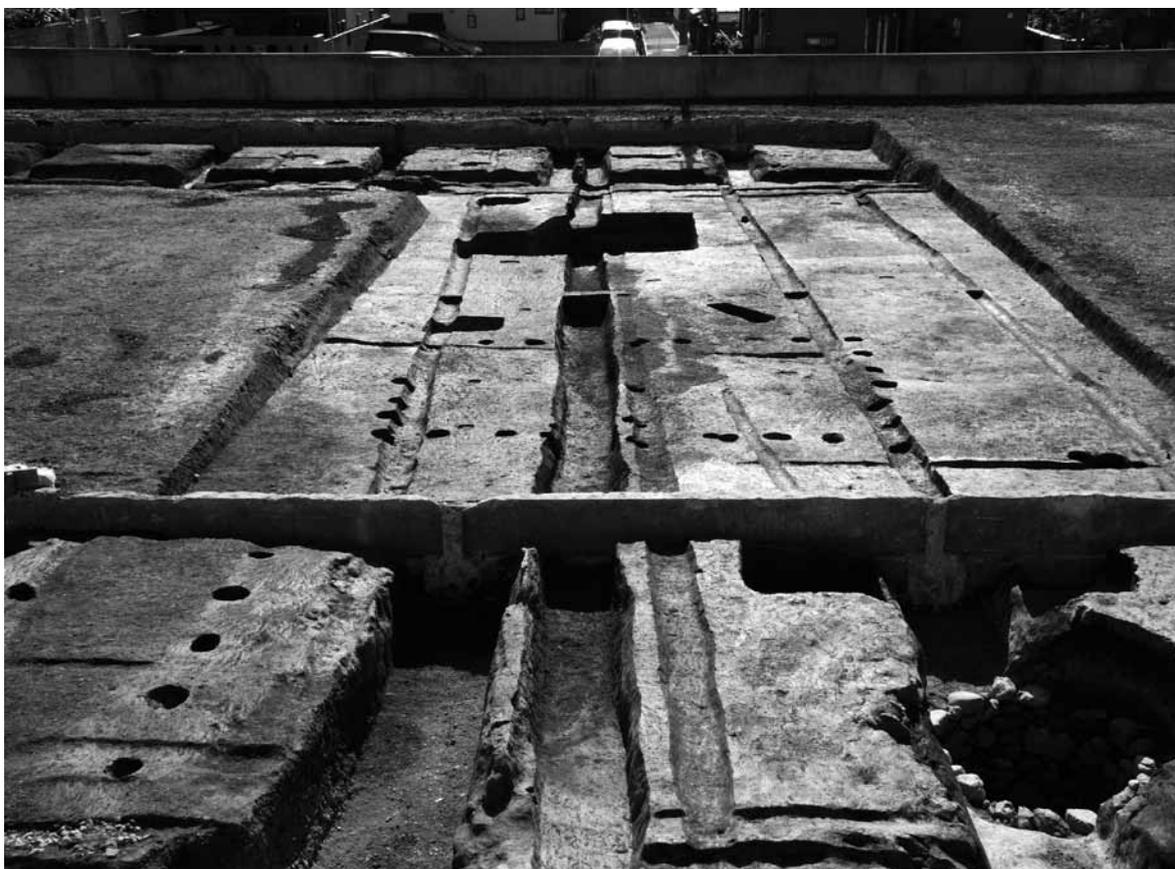
1 柱列2 (南から)



2 土坑581断面 (東から)



3 土坑756断面 (東から)



4 第1-2面全景 (北から)



1 第2面全景（西から）



2 掘立柱建物3（北から）



1 掘立柱建物4（北西から）



2 掘立柱建物4 柱穴92断面（南から）



3 掘立柱建物4 柱穴715断面（南から）



4 第3面南半全景（西から）



1 掘立柱建物5 (南南東から)



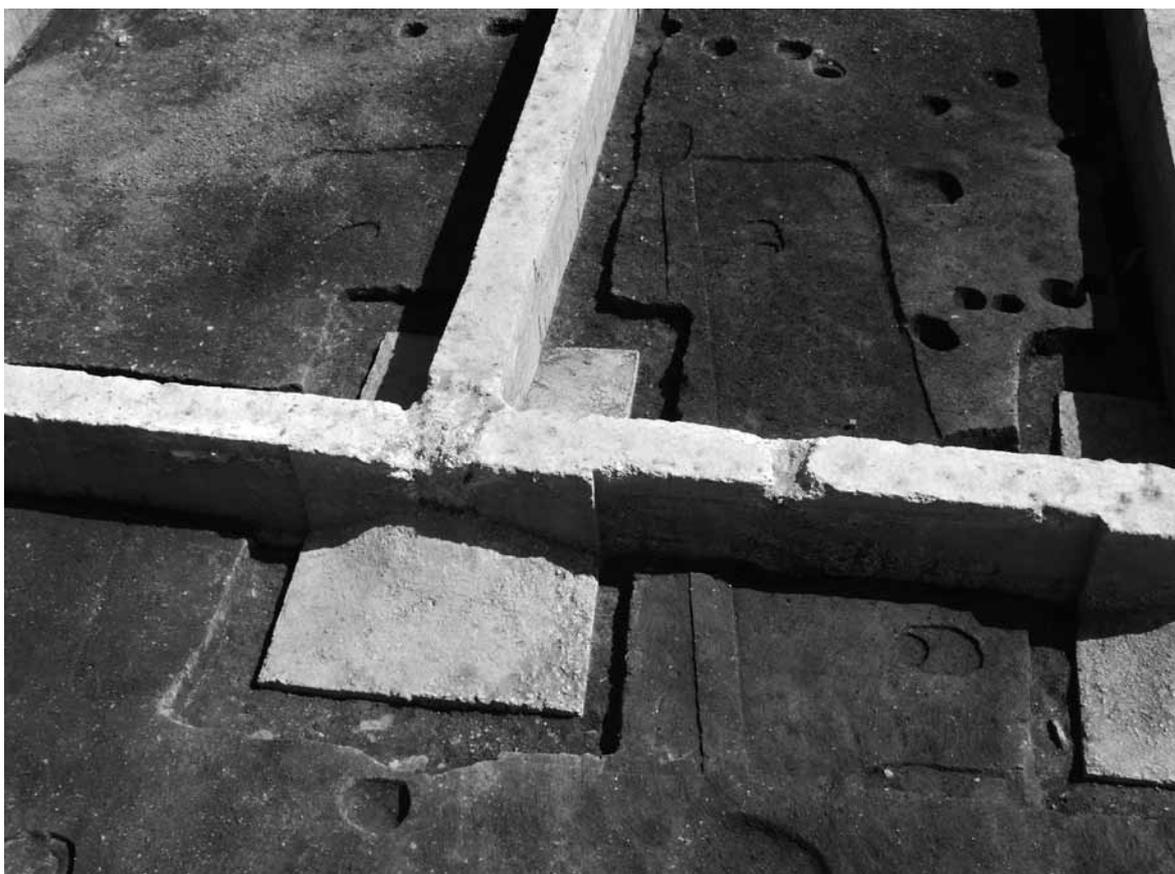
2 掘立柱建物6 (南西から)



3 溝1092 (西から)



4 竪穴建物1093 (南南東から)



1 豎穴建物393（西から）



2 豎穴建物107（西から）



3 豎穴建物107床面土器出土状況



1 竪穴建物135 (北北西から)



2 カマド400 (北西から)



3 カマド400完掘状況 (北西から)



4 溝1107 (北から)

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうほくへんさんぼうろくちょうあと							
書名	平安京右京北辺三坊六町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2013-14							
編著者名	柏田有香							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2014年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとしきたく 京都市北区 たいしょうぐんさかたちょう 大將軍坂田町 22番地	26100	1	35度 01分 28秒	135度 43分 35秒	2013年12月 16日～2014 年3月25日	1,540㎡	学生寮 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	飛鳥時代 ～奈良時代	竪穴建物、掘立柱 建物、溝、土坑	土師器、須恵器、瓦類		奈良時代の掘立柱 建物と竪穴建物を 検出した。 平安時代の掘立柱 建物を検出した。 室町時代の掘立柱 建物と石組井戸を 検出した。		
		平安時代	掘立柱建物、土坑、 柱穴	土師器、須恵器、緑釉 陶器、輸入陶磁器、瓦 類、金属製品、石製品				
		鎌倉時代 ～室町時代	掘立柱建物、塀、 柱列、井戸、土坑、 溝	土師器、須恵器、山茶 椀、瓦質土器、焼締陶 器、施釉陶器、輸入陶 磁器、金属製品、木製 品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2013-14

平安京右京北辺三坊六町跡

発行日 2014年3月31日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961